

どうしてこうなったのでし  
ょうか！？（仮）

mono0519

## 主人公

---

俺の名前は倉部光司。

年齢は17歳だ。

実家から少し離れた高校に通っていて、今は一人暮らしをしている。

取り立てて、紹介するほどの取り柄なんてないはずだ。

.....こんな感じでよかったのか？

——ちゃりん……

しまった、と思った時には既に百円玉は地面と衝突し、小気味良い音を立てていた。

夏の日差しを浴び、きらきらと金属光沢を周りに降りかけながら百円玉は転がっていく。

当然俺はその後を追った。貴重な百円玉だ。ポッケには十円玉しか残っていない。百円を失ったらジュースが買えなくなってしまう。

自動販売機に背を向け、百円玉の転がるあとを中腰で追う。アスファルトの凹凸が百円玉の軌道を不規則にするため、なかなか捕まえられない。くう！すばしっこい奴め！

たかだか半径1センチ程しかない円形の金属片にここまで翻弄されるとは男のメンツが丸つぶれである。

しかし。

しかしである。

男のメンツがなんだ。

百円という価値を持つその金属片を手に入れるのにどれだけの苦勞があると思っている。汗水流して働いたお金である。たかが百円、されど百円だ。メンツなど気にしてはいけないのだ。

俺の思いを知ってか知らずか、百円玉はころころと嘲笑するかのようには手をすり抜けては先へと進んでいく。

と、思いきや。

コツン、と進路を遮る何かに当たり、百円玉はあっけなく横倒しになった。

「よし！」

つい、声をあげてしまった。

俺の手には百円玉が握られ、悔しそうに鈍く光っている。

歓喜もそこそこ、百円玉と戯れていた熱を冷ましつつ、ふと、百円玉がブチ当たった何かを見てみた。

それは茶色のローファーであった。

——嫌な予感がする。

俺は今しゃがんだ状態であり、周りの様子など気にせず、それこそ脇目も振らずに百円玉と追いかけてっこをしていた。無論、目の前のローファーに見覚えなど、ましてやそれから生えている足については心当たりの欠けらすらない。一体、俺の前には「何」が立ち塞がっているというのだ？

恐る恐る顔を上げる。

黒いソックス。灰色のスカート。白のシャツに、膨らむ胸元には赤いリボン。

逆光になっていて顔は判らないが、間違いなく、女の子である。

間抜けにも百円玉を握りしめ、少しばかりとはいえ歓喜に震えていた、そんな男子高校生——つまり俺を見下ろすように顔を向けていた。

あまりの、あんまりの状況に硬直していた俺に彼女はなんと話しかけてきた。

「ねえ、あなた」

「……」

「あなた、もしかして——」

俺はただ呆然としつつ、彼女の顔を見ていた。

「——もしかして、投げ販!？」

言っている意味は、それこそ金属片の大きさすらも理解できなかったが、ただ俺は判ったことがある。

繰り返す。

——嫌な予感がする。

俺は立ち上がると、ズボンの膝についた汚れを手で払い、すたすたとその場を離れた。  
——離れようとした。

「ああ！待って！私もしがない『投げ販』なの！」

俺はその言葉を聞いて立ち去るスピードを速めた。なんだその「しがない」ってのは。

「ちょっと待ってってば！」

彼女は俺の腕を引つつかみ、ぐいぐいと引っ張る。

しかし俺は男で、彼女は女。力に関しては俺に分がある。ずりずりと彼女を引きずりつつ、あくまで無関係であることを装いつつ、歩を進めていった。

もはやジュースなど、どうでもよかった。

直ちにこの場から立ち去りたい。

この女——おそらく女子高生と思われる。制服も着ているし。——と関わってもきつとろくなことにならない。本能がそう告げている。

「ねえ、聞いている！？……あっ！そうか！孤高の『投げ販』はその姿を見てはいけないうってこと！？紳士なあなたは、見てしまった私にその重大な過ちを背負わせる前にこの場から立ち去って、なかったことにしようとしてくれてるのね！……私もまだまだ未熟ね。師匠にあわせる顔がないわ。ごめんなさい、名も知らない孤高の『投げ販』さん」

彼女は、掴んでいた手をそっと離し、名残惜しそうに、しかし笑顔で手を降った。

「そして、ありがとう！さようなら！」

「なあ、それはツッコミ待ちってことでいいんだよなあ！？」

——っは！つい絡んでしまった。

しかしこのまま放置すると俺が『孤高の投げ販』という得体の知らない二つ名を得てしまうことになる。中学校時代でもそんな肩書きは嫌だ。まだ腕が疼いている方がマシである。

彼女はきょとんとした顔で俺の顔を見ている。

俺の言っている意味が本気でわからないのか、それとも単にとぼけているだけか、どっちにしるタチが悪いことこの上ない気がしないでもないが、まあ、きっと話せばわかる。そう、信じてる。

「えーっと、もしもし？俺の言葉、わかりますか？」

「……馬鹿にしています？」

「い、いや！通じればいいんだ、通じれば」

何故俺の方が脈絡のない意味不明なことを口走る酔っ払いを介護するような目で見られなくてはいけないのだ。

「……こほん。あー、1つだけ言っておこうと思って。俺はあんたが言う『投げ販』とかなんとか言うものは知らないし、関係もないんだ。何か勘違いしているようだけど、俺はきっと部外者だ」

「……………！」

彼女の口は綺麗に「あ」を言う形で固定され、他に解釈のしようがないほど驚きの表情を浮かべていた。驚かせた張本人である俺ですら引くほどの驚き方だ。

「そ、そんな……！じゃ、じゃあ、さっき自動販売機から離れたところで百円玉を構えていたのはなんだったの！？」

「構えてた？ただ落ちた百円玉を拾ってただけだけど？」

「拾ってただけ？——で、でも、実際自動販売機からこんなに距離があるじゃない！」

彼女が指さす自動販売機は約5m程向こうにあった。確かにそれは先ほど俺がジュースを購入しようとしていた自動販売機だ。

「うわ、ホントだ。結構、転がったんだなあ、百円玉」

「転がった……？」

「ああ、そりゃ腹が立つぐらい見事に」

「……な、なんてこと」

がくり、と。

彼女はその場に膝をついた。

「あなたは『投げ販』じゃなかった、と言う事なの？」

「さっきそう言ったじゃないか。そもそもあんたが勝手に話を進めてっただろ？」

「だって、あなたが何の反応示してくれないんだもの……」

「う、ま、まあ確かに。無視したのは悪かったよ」

「うう……どうして無視したの？」

「え？そ、それは——」

面倒なことになりそうだったから。

「ほ、ほら、俺達面識ないだろ？いきなりそんな話されてテンパってたんだよ！うん！」

「ほんと……？」

「う、うん」

あながち嘘ではないからな。

それにしても、彼女は感情の起伏が激しいのか表情が良く変わる。まるで百面相だ。いや、百面相そのものか。今し方驚いた顔をしていたと思えば、既に泣き出しそうな顔である。

俺は頭をガシガシ掻きながら、どうしたものかと悩む。

「えーっと。その、なんだ。『投げ販』って一体なんなんだ？」

「え？」

まずい。俺はなんてことを聞いてしまったんだ。

面倒に関わるどころか、引きずり出すような質問だぞ、これ。

質問の意味を理解し始めた彼女は、顔をぱあーって輝かせ始めた。

「そ、それはね——！」

「おい、そこのに一ちゃん」

突然、遮るような声。低くドスの利いた音。

またか。

——嫌な予感がする。

「そこにいるのは、あたいの弟子じゃないのかい？」

「し、師匠！」

本当にろくなことにはなりそうもない。



「——と、言うわけだ。何か質問はあるかい？に一ちゃんよお」

「さすが師匠！格好良いです！」

きりっと表情を整え、若干見下ろす形でその『師匠』とやらは俺に確認をとった。『弟子』はというと師匠をこの上なく崇拜しているようで、目をキラキラさせて目一杯の拍手を師匠に送っている。

……とても、やりづらい。

しかし、『おい、に一ちゃん』と絡まれた時はどうしようかと、幾つも重なる意味で不安だったが、案外、思いの外、驚くことにこの『師匠』と言う人は話が通じる人物であった。

可愛い愛弟子が地を這蹲る様を俺が強要させている、そのように見えたいが、俺の話の聞くと勘違いを謝罪し、その上俺が投げ掛けた質問の返答さえしてくれた。

### 『投げ販』

つまりは『硬貨を投げて自動販売機からジュースを購入する行為、および人物』のことを言うらしい。

薄々（きつとろくでもないことだろうと）勘付いてはいたが、しかし師匠と呼ばれる彼女の口からその説明を聞いた時は突っ込まずにはいられなかった。あまりの平凡かつ面白味のないツッコミであったためその場は白けたがそれはそれ。俺は本来ツッコミというお笑いの技術を息をするように扱えるわけではない。そもそも縁がない。

それはさておき、誰がこんな無理やりな略称と、そもそもの単なる説明でしかないその名称は、何時頃産まれたか定かではないらしい。俺はてっきりこの二人だけで盛り上がっている世界だと思っていたが、彼女ら以外にも『投げ販』と呼ばれる者たちは居るらしく、それは自動販売機が世間に普及し始めたころからいつの間にか存在したらしい。荒唐無稽な話あるが、見てしまったら信じるしかない。

そう見てしまったのだ。

……

……………

名も知らない『師匠』と呼ばれる人物。

出立ちはまさに西部劇に出てきそうなガンマンスタイル。

見た方が早い、と目深にウェスタンハットを被ると俺が百円玉を拾った位置に静かに立つ。

何処からともなく風が吹き、緊張が辺りを支配する。

盛夏の暑さにより頬を汗が伝う。

と。

緊張が最高潮に達した瞬間、『師匠』は動いた。

右手がブレたと同時に、空中に3つの硬貨が浮かんでいた。

百円玉1枚。

十円玉2枚。

それは持っている硬貨の確認のように思われた。

3つの硬貨がウェスタンハットの奥に隠れた鋭い瞳の高さに到達した。

自由落下が始まる。

すると『師匠』は右手を横になぎ払うように振り、3つの硬貨を手中に収める。

音もしない早業。

一連の動作は滑らかで実に静かだった。

しかし次の動作で静寂は破られる。

キン……！

金属の通るような音。

一瞬、何の音か判断がつかなくなった。

「上です……！」

『弟子』が呟く。

空を仰ぐと、高く高く硬貨が打ち上げられていた。

『師匠』は硬貨を親指で弾き飛ばしていたのだ。

あの硬貨は一体いくらなのか——判断できない。

硬貨は緩く回転し、青に塗られた空の黒い点として宙に浮かんでいる。

しかし『師匠』は上を見ない。打ち上げた硬貨を見ない。

次の動作に移っていった。

右手を腰に当て、重心を下げる。

ガンマンがホルスターから銃を抜き出し、構えた格好に似ていた。

握られた右手が動く。

キンッ！

先ほどより強い金属音。

衝撃波と共に硬貨が勢い良く飛ぶ。

空を裂き、硬貨は自動販売機の投入口を目指す。

入った……！

そう思った。

が、しかし。

わずかに軌道がズレたのか、投入口に弾かれ硬貨は激しく回転しながら自販機からゆっくりと離れていく。

失敗だ。

この状況ではリカバリーなど出来はしない。

『師匠』の顔を見る。

見せ場で失敗した彼女は一体どう思っているのだろう。

自信に満ちた顔は――。

不敵に笑っていた。

右手を伸ばし、先ほどより明らかに力を込めて2枚目の硬貨を弾いた。

まさか――！

空気抵抗を無視し、弾丸の如く飛ぶ硬貨。

弾かれた硬貨と投入口が水平に並ぶ瞬間、2枚目の硬貨が1枚目の硬貨にブチ当たる。

縁と縁。

触れた瞬間、水平方向の運動量がほぼゼロに等しかった1枚目の硬貨を押し込むように、作用反作用を上回るスピードで、2枚とも投入口に滑り込む。

ガチャン！ガチャン！

乱暴に硬貨が入り、自動販売機の液晶が表示を変える。

ピッ。

『100』

ピッ。

同時に。

ずらっと。

整然と並んだ購入ボタンが赤く紅く点灯する。

まるで弾丸で撃たれた人間の血が飛び散るように。

少し遅れて「いらっしゃいませー」と、暢気にアナウンスが流れる。

撃たれたのに気付かない、哀れな被害者かの如く。

見事だった。

だが、それで終わったわけではない。

『師匠』の上空に浮かぶ硬貨が残っている。

液晶の表示から判断するに、その硬貨は十円玉。

自由落下を既に始め、重力加速度に従い、落ちる速度を上げている。

『師匠』は硬貨を見ずに両手を構える。

力を溜めた右手を左手で覆うように。

狙いを定めるように。

伸ばしきった両手と落ちてきた硬貨が――、

重なる。

ドンッ！と、硬貨を弾いた音とは似つかわしい轟音が鳴り響く。

『師匠』の両手は反動で跳ね返った。

銅の、赤色の軌跡が一直線に走り、空気を押しのけるように飛ぶ。

圧縮された空気が辺りを揺らし、衝撃波となり襲う。

購入金額は既に足りている。

ならば狙った先は――。

ガツッ！ともバンッ！とも聞こえる音が響き、自動販売機に衝突したことを知らせる。

穿った場所は購入ボタン。

命中したボタンのみが、穿った穴のように、赤く丸く光る。

それは珈琲（無糖）の購入ボタンだった。

ガコン……。

取り出し口に商品が落ちる。

「ありがとうございましたー」のアナウンスが無機質に流れ、購入ボタンを押した十円玉はチャリンという音とともに地面へと落ちた。

「ふう……」

『師匠』はゆっくり息を吐き出すとこっちを振り返る。

「——と、言うわけだ。何か質問はあるかい？に一ちゃんよお」

……………

……

と、まあそんなわけである。

俺は到底信じられない曲芸を見せつけられ、もはや硬貨を弾いていた親指は大丈夫なのかとか自動販売機は壊れてないのかとかそもそも人間業ではないじゃないかとか、そういった類いの疑問などどうでも良くなっていた。従って質問も何もない。ぐうの音もない。

師匠と呼ばれる彼女は俺からの質問がないと判断したのか、てくてくと自動販売機の方へ歩いていき、取り出し口から商品を取り出す。ついでに地面に落ちた十円玉も拾っていた。

そこは歩いて取りに行くんだ……。

ヒーローショーのあとに正義の味方の背中からおっさんが出てきたところを目撃してしまった、なんとも切ない気分になる。いや、中の人がいると理解してるとは言えそれを目の当たりにした時の複雑な気持ちの方が近いかな？

しかし師匠の歩き方や缶コーヒーを開ける動作は鷹揚で自信に溢れていた。堂に入るといふか悦に入るといふか、様になってはいた。弟子はその姿を眺めて、はああああ……と悦が混じった息を漏らしていた。両手なんか胸の前で祈るように組んでいる。彼女の眼差しは、単なる憧れの眼差しであって欲しい。あってくれ。

それはともかく、俺はそろそろ頃合いだろうとコーヒーを飲む師匠に話しかける。

「ま、まあ。なんとなく——というレベルを遥かに超えて『投げ販』というものは理解できました。ありがとうございます」

「そーかい。そりゃよかった。説明するのは苦手ななあ。伝わって何よりだよ」

「とてもよく判りましたので、そろそろ俺はこれで……」

「おお、そーかい。それじゃ、縁があればまたな」

さすが話のわかる人は違う。礼節さえ守れば後を引かない、尾を引かない。

彼女は缶コーヒーを口に付けたまま、ずっと顔の位置まで手を上げた。別れの挨拶だろう。関わりたくなかったとは言え、すごいものまで見せてもらった上、あっさりと帰らせてもらえると、少しばかり別れが名残惜しくなる。

いい人達だったな……。

「また」とは言っていたが、もう二度と会うことはないだろう。世界は広い。そして少しばかり残酷だ。

俺は踵を返すと、心残りを振り払うように、いつもより少し早い歩調でその場を立ち去った――。

了。

と、半ば無理やりに終わらせた。

「そういう話だったのさ……」でいいから早く終わらせたかった。

何故なら俺は踵を返す時に弟子である女子高生の顔が頭から離れない。気になって仕方がない。

だから『歩を早めた』のだ。

なにせ彼女の顔は——、

「え、ええ！？このまま終わるの？折角知り合ったのに？」

という不吉な考えを彷彿させる表情だったのだ。

むしろぼそぼそと呟いてたのが聞こえなくもなかった気がしないでもない。いや、きっと気のせいだ。だから早くこの場を立ち去ろう。

「し、師匠！いいんですか、このままでっ！」

俺にまで聞こえるような、いや俺に聞かせるような大声で彼女が叫んだ。

あーあー、聞こえないー。

耳を塞ぎ、ダッシュする。——しかけた。

チッ！

耳を塞いだ手の甲に何かが擦った感覚を感じた。

そして斜め前にあった電柱に何かが弾かれ俺の目の前に転がった。

頭を抱える形で転がった『何か』を見る。

百円玉だった。

塞いでいた手を離し、恐る恐る振り返る。

「おう、に一ちゃん。弟子があんたに用事だってさ。聞こえたよな？だからもう——無視するなよ？」

目深に被ったウェスタンハットから覗く鋭い眼光。恐らく百円玉を弾いたであろう右手を『まだ構えた状態』で、そんな事をおっしゃった。

だから俺の次の台詞は決まっていた。

「は、はい……」

心残り。

あったのは心残りではなく。

——嫌な予感だったのだ。





物語は、残念ながらまだ続く。

もう終わってもいいと思うのは俺だけなのだろうか？

少なくとも、そうは思っていない人間が、二人ほど居る。目の前に。

「あ、あの……！」

「……………」

「もしよかったら、やってみない？投げ販」

「丁重にお断りします」

「し、師匠お！断られました！」

「おーよしよし」

「……………」

もじもじとしながら未知の世界に誘ってきた女子高生に対し、俺は即答で断りを入れると、彼女は師匠に抱きついて泣き出した。バレバレの嘘泣きである。ああ、やりづらい。

「に一ちゃん。あんた名前は？」

「え？あ、あー…」

名乗ってもいいものだろうか。

「どうした、記憶喪失か？」

「果てしなく馬鹿にされているような気がするのですが、まあいいです。俺は、倉部です。倉部光司」

「倉部か」

「はい」

「倉部」

「はい」

「比べ……る？」

「俺を動詞にしないでください！」

ちなみに「同士」とも掛けてみた。果たして彼女らに伝わったのだろうか。

「よし、倉部。これも何かの縁だ。運が悪かったと思って弟子の言う事を聞いてやってくれよ。な？」

伝わってなかった！

弟子なんかは師匠に抱きついたままこちらを見て、こくこくッ！と首を縦に振っている。

師匠は話のわかる人だと思っていたが、前言撤回、何一つわかっちゃねえ！さっきまで見送る気満々だったではないか。……まさか、この師匠と言う人も俺との別れを惜しんでるというのか？

「師匠おー（すりすり）」

「よしよし（なでなで）」

単に弟子を溺愛してるだけだった。

あー、もう、帰っていいだろうか？

「ダメだ」

「ダメよ！」

「ダメですか……」

そんなこんなで、どんな困難が待ち受けてるか定かではないが、俺は『投げ販』に挑戦する運びとなった。

とんとん拍子で悪い方向に話が進んでいく。何故だ。どうしてこうなったんだ。

「あ、そうだ！私たちの自己紹介、まだだったよね？」

「んあ？あー、そうだったな。悪いな、倉部」

「あ、いえ、お気になさらず。さっさと『投げ販』とやらをしましょうよ」

名前など覚えた日には「赤の他人」から「知り合い」までレベルアップしてしまう！

「そんなのあとあと！私は藤枝美樹。よろしくね、倉部くん」

「あたいは佐倉葵」

「藤枝さんと佐倉さん……」

覚えてしまった！軽快なBGMが流れてきそうである。

「そうだ、藤枝」

「なんです？師匠」

「お前、『先輩』として倉部にジュースを奢ってやれ。金はあたいが出すから」

「……！了解しました、師匠。まかせてください！そして倉部くん。いや、後輩くん！よく見てよね。私の『投げ販』としての実力をっ！」

「お、おいおい——」

奢ってもらうのは申し訳ないとか、なんか俺も弟子の一員になってないかとか、そもそも俺はその後ジュースを買うわけで今奢ってもらうのはいささかもったいないとか、色々言いたいことはあったのだが、既に藤枝は俺が百円玉を拾った位置（そこは『投げ販』をする定位置なのか？）まで移動してしまっていた。

元気が有り余っているのだろう。藤枝はぐるぐると両腕を回し、鼻息も荒くしている。

「いきます！」

藤枝は掛け声とともに構えに入る。

——嫌な予感など、とうの昔の話であった。

全ては一瞬だった。

——キンッ！

と、小気味良い金属音が1つ聞こえた。

その音の余韻がまだ辺りを包んでいる中、次に聞こえた音は——

ガチャン。

ゴトン。

である。

本当に一瞬の出来事だ。

自動販売機の取り出し口にはジュース（コーラ）が出現し、「ありがとうございましたー」のアナウンス。

まるで魔法を使ったようにジュースの購入が終わっていた。

「え……？」

俺は思わず、声を漏らしてしまう。

「どお、どお？私の実力はっ！後輩くんも見習ってね！」

藤枝は手を高くあげたかと思うと、それを上から胸の辺りへと振り降ろした。そして「いえーい！」と快活な笑顔を俺に向け、腰に手をあてVサインをした。Vサインの間、人さし指と中指の間には、百円玉が輝いていた。

見習え、と言われても何をしたのか全くわからないこの状況では、何を見て、どうやって習えばいいのだろうか。

藤枝はそのまま自販機へと歩いていき、上機嫌でコーラをとり出すと、カシュ！とプルタブを開け、豪快に飲み始めた。

「倉部」

「は、はい」

「何が起ったかわかったかい？」

「いえ、全く……」

「まあそうだろうとは思ったが。よし、良く聞いてろ？」

佐倉師匠が俺に気を遣ってくれた。

曰く、藤枝の『投げ販』としての特性は早撃ちであるそうだ。

両手を使い、続けざまに3発。

百円、十円、百円の順で打ち出していたらしい。

それだけに留まらず、購入ボタンを押すために使用した最後の百円玉。

それは先ほど彼女の右手にあったものだという。

彼女は硬貨を跳ね返えさせて、落とすことなく自分の元へと戻したのだ。

これだけの早撃ち。

まさに——

「ラピッドショット。小動物っぽいところもぴったりだな」

「ウサギとかけてるつもりですか？」

「どろどろしてる感じもある」

「……？」

「硬いのかもしれんなあ」

「……」

「全裸」

「もういい！へびだろ！わかったよ！」

液体、個体、裸体。

って、全然話題が逸れてるじゃないか！

「ああ！」

藤枝の叫び声。

今度は何！？

「後輩くんのジュースだったの忘れてた……」

「……はあ」

「ごめんね……？」

「いいよ、そんなことぐらい」

本当にどうでもいい。

それより、どうしてこうも『投げ販』と呼ばれる人間は常識外れの行動（ここは百歩譲って、その特異な技術に絞る）ができるのだろうか。こんな奇跡的なジュースの買い方なんて、それこそ神が降りてこない限り無理だと思う。いやいや、まさか。でもしかし……。

なのでその秘密を知るべく俺は、それとなく聞いてみた。

「あん？そんなのそこに立てば誰だって出来るぞ？」

「う、嘘だ……」

「師匠が嘘つくわけないでしょ！実際、私だって出来てるわけだし」

「藤枝さんの場合、思い込みでやってしまいそうな気がするからな」

「な、なんでそうなるのよ！」

「単純そうだし」

「むきー！」

ご機嫌な藤枝はさておき、いやはや、本当に何の秘密もないと言いきっている。これは触れてはいけない話題だったのか？漫画やアニメには原因不明の得体のしれない力が何の根拠もなく使われているように、まさかこの場においてそのような力が働いていると言うのか？ならば何故このようなどうでもよい（本当にどうでもよい）場所にこのような力が働くのだ……。もっと世界の危機とかに然る可き人物に発現しろ、と思わないでもない。もちろん、俺の目が届かない範囲でひっそりと世界は救われて欲しい。

世界は思った以上に平和なのかもしれない。

うんうん、と俺は頷いていた。そう納得するしかない。世界平和万歳。

「よおーし。倉部。お前の番だぞ」

「頑張っ、後輩くん！」

「あの、これ終わったら帰っていいですよね……？」

「もちろん、いいぞ」

「よかった……」

「そのかわり連絡先は教えてね？」

「あー、聞こえなーい」

「もう！」

藤枝は後輩くん後輩くんうんぬんかんぬんと五月蠅く構ってくるが、俺は連絡先は教える気はない。藤枝の後輩が出来た喜びはわかるが、残念、俺が後輩なのも今日この日限りだ。明日からは新しい後輩でも見つけて、今度はそいつを構ってあげてくれ。

俺はやっぱり上機嫌そうな藤枝と、やっぱりどこか掴めない佐倉師匠に後を押されて、もうそこで百円玉を拾ったのが数時間も前のように思われる、例の場所に立つ。

全てが始まった場所。

そして今終わる場所。

——なんて書けば格好良く見えるが、大したことはない。単なる偶然が重なった場所だ。

俺はそこで息を深く吸い、呼吸を整える。

心無しか心臓の鼓動が速い。

緊張しているのか？

まさか。そんなはずは——。

俺はある結論に至る。

なんだかんだいって俺は二人の『投げ販』という行為に感動をしていた。そしてこれから自分がその『投げ販』を行う。もしかしたら不思議な力が働き、奇跡のような、幻想のような、嘘のような、そんな動きが出来るかもしれない。

つまりワクワクしているだけなのだ。

楽しい。

不覚にもそう思っているのだ。

俺はそのような感情を内に抱えているを、特にそこにいる二人には気付かれないように、隠す。

そしてその感情を振り払うかのように、俺は言う。

「それじゃあ、行きますよ……」

——もう嫌な予感などしていなかった。

## 1-6(END)

---

結果から言おう。

——俺は失敗した。

俺が経験した顛末は次の通りだ。

.....

.....

自動販売機から約5m。

常人ならそこからジュースを購入しようとする思わない位置。

そんな場所に佇む男子高校生——つまり、俺がいた。

俺は掛け声もほどほどに、ポケットに手を突っ込む。

取り出したのは価値が付加された金属片。

硬貨だ。

取り出した硬貨を右手で投げては掴み、投げては掴みを繰り返す。

俺だって格好つきたい時はあるのだ。

これでも男である。

ここで格好つけなきゃ、男のプライドに傷がつく。

メンツ？

はは、何のことかな。

俺は空中に浮かぶ2枚の硬貨を眺める。

この場の雰囲気のおかげ、動体視力が上がっている気がする。

ゆるりと回転する硬貨の数字もはっきりと見える。

十円玉と百円玉だ。

「——.....ん？」

そこで俺はあることに気付く。

男のプライドやら格好つけなどを言った手前、とても恥ずかしいミスに。

ちくしょう、なんてこった。

硬貨が『2枚』しかなではないか！

2枚では購入金額を満たしていても、購入ボタンを押すことが出来ない。

先駆者の2人はそのため3枚の硬貨を使用していた。

俺は元々、ジュースを『普通』に買いに来た身である。

余計な小銭など持ち合わせていない。



そして自動販売機には百十円未満の商品はない。

つまり、商品が購入できないのだ。

……どうする？

と、悩んだところでやるべきことは決まっている。

硬貨をあの二人のどちらかに借りればいいのか。

二人は購入ボタンを押すための硬貨を少なくとも1枚は持っている。

掛け声まであげて雰囲気作りをしたこの状況で「お金借りてもいいですか？」と言い出すのは、結構、いやかなり格好悪いのだが背に腹は代えられない。

男のプライド？

そんなのを気にしている場合ではないのだ。

そうと決まれば、俺は行動に移る。

今し方、投げ上げた硬貨を手中に収めた後、声をかける。

その動作をした。

——つもりだった。

「はっ——」

何故そのタイミングだったのか、未だに謎であるが。

「——くしゅん！」

硬貨を掴もうとした、その時とほぼ同時刻、くしゃみが出たのだ。

当然、くしゃみの反動で手元は狂う。

すると、どうだろう。

2枚の硬貨は手の中に入ることなく、狂った手により別々の方向に弾き飛んだ。

1つは上方。

もう1つは下方に。

上方に飛んだコインは吸い込まれるように俺の額へと飛来した。

くしゃみで俺の頭は高速に移動中である。

よって。

パチン！

と、それはもう良い音がして、額と硬貨がぶつかり合った。

「——いってえええええ！」

俺は激痛の走る額を両手で押さえる。

押さえて気付く。

硬貨は一体どこに行った？

——ちゃりん……

今日、この音を聞くのは二度目である。

反射的に地面へと視線を向ける。

輝かしいまでの銀色が俺を挑発するように転がっていた。

百円玉だ。

今日の出来事の元凶。

全ての始まり。

俺はもう冷静さを失っていた。

——こいつを捕まえなくては。

その焦りため、俺は気付くのが遅れた。

百円玉に飛びかかろうとジャンプする足下に小さな小石が転がっていたことに。

ぐるん。

視界が急に回転する。

地面、塀、空、そして自動販売機の順に目まぐるしく風景が変わる。

俺は、宙返りをしていた。

足下を小石に取られ、ジャンプする勢いに乗せて、肢体が見事に回る。

俺はその時何が起きたか判らなかった。

微かに感じたのは右手の指が百円玉を捕らえる感覚。

右足のかかたに何かが当たった感触。

そして数瞬後に尻から伝わる衝撃。

どすん、と俺は尻餅をついていた。

あまりの展開にきょとんとするしかない俺。

ふと見れば、自動販売機の購入ボタンが全て点灯している。

「え？」

呆気にとられる俺。

そして、再度訪れるあの感覚。

独特のむず痒さ。

「はっくしょい！」

ごつん！

くしゃみをしたと同時に、再び額に何かがぶつかる。

痛みと、くしゃみと、その他諸々で若干涙目になる俺の耳に届いたのは信じられない音であった。

ガコン……。

「ありがとうございましたー」

額に手を当てうずくまる体勢だった俺は、ぱっ！と顔を上げ自動販売機へと注目する。

取り出し口にはジュースが転がっていた。

しかもそれは。

——お目当ての乳酸菌飲料水でだったのだ。

……………

……

『投げ販』は成功した。

いや、『偶然にも成功させてしまった』のだ。

そもそも素人同然の俺に何が出来ると言うのだろうか。せいぜい、投げたはいいがあんな隙間何mmの世界に決めることなど叶わずどこか自動販売機の適当な場所に当たって弾かれる、というのが関の山だ。そうなるのが当たり前だった。

だが何故か不幸にも俺は成功した。それは喜ばしいことであつたのかもしれない。しかし俺はそれら全てひっくるめてを『失敗』と称することにした。成功させたのが失敗だった。

俺がそう思う理由。

そして何故俺は『成功させた』と知っているのか。

それらは深く関係している。

……

……………

「す」

呆けた顔で座り込んでいた俺は変な音を聞いた。

「すごーい！！」

それは藤枝の歓声だった。

彼女は何やら体全体で喜びと驚きを表現し、俺に小走りで近寄ってきた。

そして俺の手を掴むとぶんぶんと振りながら早口に捲し立てた。

「すごい、すごいよ後輩くん！いや、もう後輩くんとは呼べないかな？あんなすごい技私には到底無理だし。それじゃあ倉部くん。改めて聞くけど、本当に初めてなの！？まさか本当に孤高の『投げ販』だったりとかするの？日夜誰にも知られることなく開発した技をあまりにもしつこい私にこれ見よがしに実演することで恐れ戦かせて追い払おうという魂胆？ふふ、残念だったわね。私は逆に燃え上がるタイプなのよ！——と、いうわけでサインください！」

「どこから突っ込めばいいかわからんが、とりあえずしつこいという自覚はあったのか……」

ねえねえ、サインは一？と聞いてくる藤枝を軽くあしらいつつ、俺は自分の身に何が起ったのか考える。

……全くわからない。

正直な話、藤枝が俺をベタ褒めしている理由が判らない。

俺はジュースを購入できた、のか？

「……俺は成功したのか？」

「またまた一、白切っちゃって一。あんなに華麗に『投げ販』決めておいて良く言うわよ」

「成功したつもりもないんだけど……」

「謙遜しっちゃって。そりゃ、あんな技、出来る人なんてこの世にもう一人いるかいがないかぐらいだけど、あんなに余裕たっぷりに決められちゃ逆に嫌味に聞こえちゃうわね」

「……」

「な、なに？」

俺は目まぐるしく変わる藤枝の頬をぐにぐに引っ張る。妙に憎たらしい。ふがふがと何か言って怒っている藤枝を構っていると、俺はふと気付く。

佐倉師匠が会話に参加していないのだ。

辺りを探すと、佐倉師匠は俺が『投げ販』を始めた時と同じ場所に立っていた。少し俯いており、ウェスタンハットに顔が隠れて表情が窺えない。

どうしたのだろう——？

そう思った時、はたと俺はある可能性に気付いた。

まさか、佐倉師匠が変わりに成功させたのではないだろうか？

俺が最初、じゃらじゃらと硬貨を投げていた時、彼女は既に俺が購入不可能であることに気付いていたのだろう。そして俺は間抜けにも持っていた硬貨をとり損ない、辺りにばらまいた。揚げ句の果てに転んだのだ。

そうか、彼女は見ていられなかったのだろう。

素人同然の俺に無理を言い、せめて体のいい失敗ならまだしも、硬貨の数が足りないという初歩的なミス、硬貨を落とすと言う大失態、そして盛大なずっこけときたら、格好悪いのレベルではない。彼女なりの優しさで、格好悪いのレベルを超えた恥ずかしい俺をフォローしてくれたのだ。

どうやって硬貨を投下したかわからないが、きっと彼女のことである、藤枝の目を盗みつつ俺が取り零した硬貨を自分の持つ硬貨で弾いて投入口へ導いたのだろう。結果、それが藤枝の目には「すごい技」として写り、まんまと俺が『成功させた』ことになったのだ。

全く、すごい人である。

そして奥ゆかしい人だ。

俺のフォローをしてしまった罪悪感があるのだろう、会話に参加せず、ぶっきらぼうを演じているのだ。

「佐倉さん！」

「——！」

俺はつい声を掛けてしまった。佐倉師匠の優しさに甘えて、俺が成功したことにさせてもらうが、せめてお礼ぐらいは言いたかったのだ。

佐倉師匠は、ぎこちなくこちらへ近づいてくる。緊張しすぎだ。なんだか笑いが込み上げてくる。

俺は立ち上がると、サインサイン！と五月蠅い藤枝に、ジュース取ってきてくれたらサインしてやる、と適当に言い、藤枝をこの場から遠ざけた。せめてお礼を言う間ぐらいは二人きりの方が、俺にとっても佐倉師匠にとっても都合が良いだろう。

佐倉師匠は俺の傍までやって来ると、ウェスタンハットを脱いだ。

俺がお礼を言おうと口を開く。

それよりも先に、佐倉師匠が声を発した。

「あ、あの」

ん？

佐倉師匠の声にしては高い気が？

「あ、あたしにもサイン！……ください」

俺は、ぱっ！と自動販売機の方を振り返る。

藤枝は丁度、乳酸菌飲料水を元気よく取り出しているところであった。

——あれ？では今の声は誰のもの？

俺は再び佐倉師匠の方へと振り返る。

「だめ、ですか……？」

ウェスタンハットで口元を隠し、頬を赤く染め、うるうるした瞳で俺を見つめる可愛い女の子がいた。

——おかしい。ここにはあの男勝りな眼光鋭い佐倉師匠がいたはずだ。

俺はまた振り返る。

藤枝はすぐ傍まで帰ってきていた。

「あれ？葵ちゃんに戻ったんだね」

「葵……ちゃん？」

「うん、葵ちゃんはウェスタンハットをかぶると性格変わるのよ。私の師匠になるのはその帽子を被ってる間だけなの」

「そうなんです。お恥ずかしいながら」

「へ、へえ……って、そうじゃなくて。え、サイン？あれ？」

てへへと照れながらそう言う佐倉師匠——もとい、佐倉の性格の変化はこの際、目を瞑るとして、何故彼女がサインを欲しがるとののだ？

い、いや、まさか。

そんなはずは、

「あの。あたし、倉部……君、の技を見て感動しました！2枚しかない硬貨に気付いたときはどう

しようもない間抜けかと思いましたが、あれは後々のための演出だったのですね！まんまとひっかかりました。腑抜けた印象をもたせ、まるでこちらに助けを求めんばかりの雰囲気をもとい、油断させたところをあのくしゃみからのヘディング。手を使わない射撃はすご腕の『投げ販』でも難易度が高いのに、それに挑戦する心意気。見ていて鳥肌が立ちました。残念ながらその硬貨は投入口から弾かれたわけですが、しかし、上手いですね。同時刻に起きた、一見して硬貨を落とすなどと言う不祥事。しかしそれは、そこに注目させるためにわざと硬貨を落としたにすぎない。弾かれた十円玉に見向きもせず、地面を転がった百円玉を掠め取るのと同時に小石を蹴り上げると、そのまま前転宙返り。綺麗に弧を描く右足に合わせて百円玉を指から離し、かかとのオーバーヘッドキック。かかるとに弾かれた百円玉は、先ほど弾かれた十円玉に命中。そのまま2枚の硬貨は投入口へと吸い込まれていきました。そう、弾かれた十円玉すら演出だったのです！まるでサッカーの名試合を観ているかのような錯覚を覚えました。購入ボタンは、サポートのように硬貨投入というゴールに沸き上がり、赤く点灯。それをぽかんと見つめる倉部君は茶目っ気を出すための演技。しかし最後に残された課題は購入ボタンを如何に押すか。ペったりと座り込んだ倉部君にはもはや不可能。あたしもそう思いました。しかし複線はあったのです。それは、百円玉を拾う際に蹴り上げた小石。単に邪魔だから蹴ったのではなく、そう、全ては購入ボタンを押す、その目的を果たすため。不可能かと思われたことを可能にする。そんな状況に心動かない人なんていません！頭上から降る小石にタイミングを合わせて、くしゃみ。戯けた雰囲気のまま、あっさり購入ボタンを押す。それが難易度の高いヘディングによるものともは思わせないほど華麗に、鮮やかに。そして最後にはうずくまる姿勢から力を溜めてのガッツポーズ。もはや芸術と言っても過言ではないほどの見事な『投げ販』でした！」

.....どうやら俺は盛大な勘違いをしていたようだ。

偶然に、奇跡に近い偶然によって俺は『投げ販』を成功させてしまったのだ。

そして、その成功は最悪と言っていいほどの、最高の形で佐倉と藤枝に伝わってしまった。

佐倉の話はほとんど聞き流す形になったが、それぐらいのことは理解できた。

「な、なので、サインが欲しいです！お願いします」

「私も私も！ジュースとってきたらくれるって約束でしょ？」

なんだ、この状況は。

どうしてこうなったのでしょうか？

「.....ああ、こうなりゃ自棄だ！」

どこから取り出したのかわからないが、マジックペンを受け取り、これまたどこから取り出したのかわからない色紙に馬鹿丁寧に『倉部光司』の文字を刻む。キュッキュ、と。ペンを走らせ

るたびに鳴るその音は、俺の涙を誘うには充分だった。

サインを書いてやると、わーい！と色紙を持ちあげて喜ぶ藤枝。

佐倉も、ふふん」と上機嫌な様子であったが、ふと思いつめた顔になった。

かと思うと、俺の方へと近づいてきた。

あれ、この感覚。

——嫌な予感だ。

「あの……倉部君。もうひとつ、いい……ですか？」

「あー、いまならなんでもいいぞー」

「あ、あたしの……」

「……」

「お師匠さんになってください！」

「大変恐縮ではありますが、お断りさせていただきます」

「え！？葵ちゃん、倉部くんを師匠にするの？それじゃ私の師匠の師匠だから、大師匠になるのね！」

「ならねえよ！」

「お師匠さんが嫌なら、その、あたしと、つ、つ、付き合ってください！」

俺はその台詞が言い終わる前に踵を返して走り出していた。

佐倉が性格弱体化している今、何を恐れることがあると言うのだ。これ以上、ややこしい事態、ややこしい関係になる前に逃げなくては！俺の将来がどうなったものか知れたもんじゃない。

「あ、ちょ、逃げるなあ！」

「ま、待ってください！返事は！？」

「すまん、俺は年上の女性は好みじゃないんだ！」

「あ、あたしそんなに歳とってませんっ！まだ高二です！」

「マジかよ……」

「私は高一だよ！」

「聞いてねえし！」

「むきー！」

ウェスタンハットかぶった時は20代～30代の風貌してたのだが、俺と同じ年とは。恐るべし、佐倉。

そんなこと考えつつも、俺は全力疾走である。それでもまけない追手に、俺はこの追いかけてこがいつになったら終わるのだろうか、と他人事のように考えていたのであった。

.....



.....

『失敗』。

自宅について、くたくたになった俺が今思う『失敗』とは。

小銭を落としたことでも。

変な女の子に絡まれたことでも。

『投げ販』という奇妙な活動を体験したことでも。

そのどれでもない。

よくよく考えて欲しい。

俺の外出した目的。

——結局ジュース、飲めてないじゃん。

ただそれだけに尽きる。

終

## 主人公

---

倉部光司だ。

.....自分の名前をフルネームで紹介するのは、何か言い知れない恥ずかしさがあるな。

さておき。

好きな食べ物は大福。

好きな飲み物は乳酸菌飲料水。炭酸verもオッケーだ。

えー、この間、変わった人達と絡んでしまい、この先の人生に一抹の不安を覚えたばかりである。

これ以上変わったことはありませんよーに。

## 自販機-キャラ1

---

え、なになに？

自己紹介すればいいの？

こほん。

えー、私の名前は藤枝美樹。

今年高校に入学したばかりの現役女子学生よ！（にこっ）

学校へは実家から徒歩で通ってるわ。

割と近くて、そうね、10分も歩けば着いちゃう距離かな？

あー、好きな食べ物は……うーん、思いつかないなあ。

甘いものなら割となんでもいいかも。

好きな飲み物は紅茶！

……って、言いたいところだけど、実は炭酸飲料が好きなの。

コーラとか砂糖たくさん入っているから、あまり飲まないようにしてるんだけどねえ。

『投げ販』に関わったのは今年の春からで、偶然通りかかった自動販売機の前で、師匠との運命の出会いをしたわ！

あの時の師匠は格好良くて、綺麗で、素敵だったなあ……。

さてとっ！

こんなものかしら？

『主人公、倉部光司について』

倉部くんは、ほっとくと直ぐ逃げようとするから厄介よね。

折角お友達になったんだから、ゆっくり話していけばいいのにね。

えーっと、それから。

『投げ販』の腕前はかなりのものね。

俺は関係ない！って言ってたくせに、初めてとは思えないような芸当を見せつけられたもの。

つついサインもらっちゃったけど、実は悔しかったりするのよ。

師匠を取られちゃった感じもあるし……。

あ、そうそう、この間のジュース。

倉部くん、逃げちゃったから渡しそびれちゃったから、お返しをしたいのだけど何処に住んでるか知りませんか？

あ、秘密ですか。

.....うーん、困ったなあ。

## 自販機-キャラ2

---

.....。

あ、あ、あたしは佐倉葵って言います！

今年で17歳になりました！

え、えーっと.....。

.....。

あ、学校は実家から通ってます。

.....。

す、好きな食べ物は.....特にはないです.....。

好きな飲み物はココアですっ。

.....。

す、すみません。あたし、自己紹介って苦手なんです.....。

え、ウェスタンハット？

あ！そうですね！

(ごそごそ)

よお、これでいいか？

ま、こっちのほうがあたいにしてみれば話しやすいつちゃ話しやすいな。

それでもさっきので大体紹介は終わっちまってるから話すことはないんだがなあ。

んー、そうだな。

『投げ販』について少し話すか。

あたいが『投げ販』を始めたのは中学三年のとき。

.....ちょっと、色々あってな。始めた経緯はちょっと秘密にしておきたい。これでも乙女なん  
でね。

なんだかんだで『投げ販』としての力をつけて行って、今年の春には弟子まで出来た。

それがよお、可愛い弟子でさあ。

子犬みたいに懐いちゃって。

つい構ってやりたくなるんだよな、これが。

.....『投げ販』する以外の時でも仲良くさせてもらってる。

もちろん、このウェスタンハットを脱いだ時も、だ。

んんっ！そんな感じだ。

これで終わり！

『主人公、倉部光司について』

ん、倉部か。

最初は弟子を苛める屑かと思ったが、まあ、案外というか案の定というか、普通の奴だったな。見た目も普通だし、大したことなさそうと思っていたんだけどなあ。

あたいの目は節穴だったようだね。

奴の『投げ販』は芸術だ。

ただ買うための『投げ販』ではなく魅せることに重点を置いた見事な技だった。

倉部の姿は、その、……。

か、格好良かった、な。

あ、いや、これはだな！あんな技、誰が見たってそう思うだろ！？

そりゃあんときは勢いあまって「付き合っ」なんて言っちゃったけど……。 (もごもご)

あ、あたしもお師匠さんになってもらいたくて必死だったから……。

そ、そう！あの技を盗もうと思って！

近くにいればきっと直ぐに習得できると思ってそんなこと言ったんです！

そんな深い意味があっけいったわけじゃないですよ！

技を盗んだらポイ捨てです！

はあ…はあ…！

……。

も、もう終わりにしますっ！

どうやら俺は風邪をひいたようだ。

時刻は午前7時48分。

体の節々が軋むような痛みと鼻詰まりにより俺は目を覚ました。

昨日の晩は確かに体中怠かったが、ここまで症状は悪くなかった。それでも、夏ではあるが用心して暖かくして寝たのが功を奏したのか喉の痛みはそれほどなく、咳はたまにでる程度だった。不幸中の幸いである。

俺はぼーっとする頭で天井を見つめた。なんだか天井の板が歪んで見える。

——熱があるのかな？

体温計はどこにしまったっけ。俺は回転の鈍い頭で必死に思い出そうとする。確かテレビの辺りに……。あ、そうだ、テレビ台の引き出しに仕舞ったはずである。

「あっ！——いつつ……」

俺はガバッと勢いよく上半身を起こしたが、体中に激痛が走りそのまま布団にうづくまる。

思い出した。

昨日の深夜、見たい番組があったのだが、レコーダーで録画予約しようと思っていて、すっかり忘れていた。くう、録り忘れも体も痛い。

痛たた……と、歳とった中年親父のように腰を支えながらも一度布団に横になる。

こつん、と。

頭と枕の間に異物があるのを感じた。体勢を変えて枕を見ると、そこにはテレビのリモコンがあった。はて、昨日の晩はリモコンなんて弄っただろうか？録画しようと枕元に用意して、そのまま忘れ去っていたのだろう。それにしてもさっきまで寝ていてリモコンの存在に気付かないなんて、俺は相当風邪にやられているみたいだ。

そうそう、熱を計るんだった。

俺はリモコンを床に放り、イマイチ不調な頭を抱えながら、布団から出る。

ギシッとベッドを軋ませ、立ち上がる。

「——っくしゅん！」

立ち上がると同時にくしゃみが出た。反動で少し足下が覚束なくなる。

ブルッと体を震わせ、両腕で体を抱くように擦る。少しが寒気がしてきた。

——本格的にヤバいな。

若干フラフラしながら、テレビ台へと近づき引き出しをごそごそ物色する。

「……………」

無事、体温計を見つけた。

カバーから本体を抜き出しつつ、

「——っくしょい！」

もう一発くしゃみ。

やっぱりこの格好ではちょっと寒いかもしれない。

俺は向きを変え、押し入れに向かう。引き戸を開け、中にあった衣装ケースの中から冬用の分厚い半纏をとり出す。ばさっ、とそれを羽織り、手前の紐を結ぶ。風邪と言ったらやっぱりこの格好だろう。

ずずっと鼻をすする。

そう言えばさっきから鼻水が出っぱなしだ。今の顔を人様には見せられたら恥ずかしくて熱が余計でかねない。

ティッシュ箱を探していると、筒状のプラスチックのようなものが落ちていた。

なんだろうか。見た目はストローに見えるが、それにしても太いような気がする。友人が置いていったものだろう。そろそろ部屋の片づけもしなくてはいけないな。

ゴミは持ち帰って欲しい、と思いつつ、ストローをゴミ箱に放り投げる。失敗。

「……くっ」

投げるんじゃなかった。

俺は渋々ゴミ箱に近づき、屈んでストローを拾い、そのままゴミ箱へ入れた。

ふと頭上を何かが横切った気がして振り返った。視線の先には窓があった。窓が開きっぱなしになっていたのだ。風が流れ込んできている。

風の吹き込む窓に近づき、揺れるカーテンを払いながら、窓を閉める。

「ふう……」

さてさて。ティッシュ、ティッシュ。

そうしてしばらく搜索していると、コタツ布団を取り払ったコタツの下に滑り込んでいるのを発見した。

俺はコタツの下に頭を突っ込み、ティッシュ箱を掴む。

これでよし。

ティッシュ箱を掴んだまま抜け出そうとして、腕を変な風に曲げてしまい、体が上方へと押し出されてしまう。

ガタンッ！



「いてっ！」

頭と首、肩あたりでコタツにぶつかってしまい、それが大きく揺れる。相当おかしな格好で当たったらしく、腰の辺りまでコタツが移動してしまった。

コタツを揺らしたせいか、本が崩れ、足下にばらまかれた感触が伝わってきた。

「……ついてないな」

俺はため息もそこそこにコタツの足を押し、元の位置に戻す。そしてゆっくりと体をコタツの下から這い出た。もちろん、ティッシュ箱も忘れずに。

俺は散らばった本の片づけをしてから、ベッドに腰かける。

体温計を良く振り、水銀が目盛りより下回ったのを確認してから、脇に挟む。ひんやりとした体温計の先に、思わず身を竦ませる。

体温計も暖まり、慣れた頃、俺はティッシュを2、3枚抜き取り、鼻をかむ。あんまり強くかむと中耳炎になると、小さい頃に教わったのを思い出した。実に懐かしい。風邪の時は妙に昔を思い出すことはよくあることだ。一人暮らしを始めて結構経つが、やはり病気になると実家が恋しくなるものである。

数回、鼻を噛むとティッシュ屑をゴミ箱に捨て、体温計の結果が出るのを待った。下手に動くと計測が上手くいかない場合もあるので、じっとベッド上に居座る。

「……………」

何もしないで待つのがとても暇なのと、頭がぼーっとするのが相まって、実に眠い。

かくかくと何回か船を漕ぎつつ、数分が経過した。

——そろそろか。

俺は体温計を脇からとり、目盛りを覗き込む。

38度1分。

結構な熱である。これは病院へ行った方が良いかも知れない。

俺は時計を確認する。

午前8時11分。

確か、病院の検診は午前9時からだ。一番近い内科の病院はゆっくり歩いていったとしても30分もかからない。時間に少しの余裕があるようだ。

俺は少し考えて——、朝食を摂ることにした。

もちろん食欲なんてこれっぽっちもなかったが、病院まで歩くこと、もっと言えば早く病気を治すことを考えれば食事はちゃんと摂った方が良い。

何を食べようか。

思考が鈍っているので、考えがまとまらない。顎に手を当て、うんうんと悩む。やがて俺はパ

チンと指を鳴らし、ひらめいた。

お粥にしよう！

風邪における定番の食事と言えばこれしかない。なんで悩んだのかすら馬鹿らしくなるほどびつたりの食事だった。

確か冷蔵庫には梅干しもあったし、米も尽きてない。土鍋は小さいのがあったはずだ。

思い立ったが吉日。

早速作業に取り掛かろう。

俺は台所に立つと、まな板をとり出した。お粥を作るならまな板は必要ではないが、折角作るなら何か野菜でも入れた方がいいと思ったからである。

続いて包丁。

シンクの下にある扉を開き、包丁をとり出す。

「——っくしょう！」

少し鳴りを潜めていたくしゃみがここにきて発現する。その拍子で手を滑らし包丁を取り落としてしまった。

カツン、という包丁が床に刺さる音がした。恐る恐る確認すると、足の直ぐ横に刺さっていた。

状況を把握すると一気に風邪の寒気とは別の冷や汗をかいた。

.....包丁を使うのは止めよう。

そう判断して、包丁を再び元の場所へと戻す。

まな板も仕舞い、俺は今度は土鍋をとり出し、調理を開始した。

米を洗い、鍋に入れ、米の2倍の量の水に浸す。だしと塩を加え、蓋をし、弱火で煮込む。その間に卵を溶いておく。米が柔らかくなるまで時間がかかりそうなので、俺は部屋に戻り、おでこを冷やすシートを探すことにした。

医療関連が入った引き出しを漁り、かろうじて3枚残っていたシートを発見した。

その場に座り、シートの粘着部に貼られた透明シールを剥がしていると、足下に米粒が転がった。さっき米を洗う際に零れたのが服に引っかかっていたのだろう。俺は少しの逡巡の後、急いでシートをおでこに貼り、台所へと戻った。

土鍋の蓋を開けると、まだ沸騰していない水と米が見えた。

俺はそこに先ほど拾った米粒1つを放り入れる。3秒ルール、火を通せば大丈夫、米粒1つ残すな。.....貧乏性とも言う。

俺はなんとなく満足し、部屋に再び戻ると、ベッドに仰向けで寝そべった。

あんまり動き回ると余計具合が悪くなる。

手遅れな感じが否めないが、そこは高熱の際のハイテンションのせいだとしておく。今ならジャンプすれば60cmぐらいは飛べそうな気がする。試しはしないが。

「ふああああ.....」

横になると眠くなる。やっぱり体は病んでいるためか休息を欲しがっているようだ。

大きなあくびの後、頬に冷たい水滴が落ちる感触がした。

指で触れると確かに水のように。おおかたあくびをした時に涎が飛んだのだろう。恥ずかしい

。

指をぺろりと舐め、水滴を吸い取る。

……ん、しょっぱい？

さっき塩をつまんだのが指に残っていたのか。

それにしても眠い。だが火をつけっぱなしの今、眠ってしまうのは危険だ。目を必死に開く。

ついでに眉毛まで動いてしまう。なんだかすごい形相をしていそう。

そんなこんなで睡魔と格闘していると時間が経ち、そろそろ頃合いかとなんとか眠気を振り切って立ち上がった。ぼんやりとした頭を覚醒させるために首を振りつつ、台所へと向かう。

土鍋の蓋を開けてみると、いい感じに米がやわくなっていた。

溶いておいた卵をサッとかけ、蓋をし、火が通ったと思ったところで、土鍋をコンロからどかした。タオルで縁を持ち、こぼさないようにコタツの上へと移動させる。

丁度捨てる予定だった雑誌がコタツの上にあったのでその上に土鍋を置く。

再び俺は立ち上がると、冷蔵庫に行き、梅干しをとり出し、ついでに塩とスプーンも持って、コタツへと戻った。

土鍋の蓋を開ける。

むわっと蒸気が上がり顔を湿らせる。黄色く輝いた卵の半熟具合が、なけなしの食欲をかりたてた。俺は土鍋の中央に梅干しをのせる。これで完成だ。

出来上がったお粥を満足しながら眺める。

「いただきます」

と、小さな声で呟いて、食事を開始する。

塩加減が足りなければ、持ってきた塩を振りかけながら、するすると胃へ入れていく。素朴な味だったがとても美味しかった。

時間を掛け、食事を済ませると、綺麗になった土鍋を持ち、流しに片づけに行く。

……洗い物は具合良くなってからでいいか。

俺は病人特権を自分に行使しつつ、部屋には戻らず、洗面所へ向かった。

食べた直後に歯を磨くのは好きではないが、すぐにでも病院に行くつもりなので仕方あるまい

。

歯磨きを終え、病人特有のボロさがでている自分が鏡の向こうからこちらを窺っているのを確認し、部屋に戻る。

面倒くさいが、さすがに寝巻きでは出掛けられない。まだマシな動きやすい格好に着替えることにした。半纏も寝巻きも脱ぎ去り、パンツ1枚になるとさっさと着替えを済ませる。パンツ1枚

になった時、「きゃっ！」という声が聞こえた気がしたが、被害妄想もここまでなるとさすがに寒い。やっぱり熱があるのだ。早く病院へ行かなくては。

俺は仕度を終わると、玄関に向かう。

さて、出発だ。

「——あ、鍵忘れた」

振り返るとそこには女の子が目を回して気絶していた。

どうやら私は外れをひいたようだ。

時刻は午前7時48分。

私はとある人物から頼まれて、ある男性を『暗殺』——ではなく『嫌がらせ』をしにやってきた。それが私の仕事だ。報酬は、とある高級アイス1ヶ月分。また『嫌がらせ』の質によって追加の報酬（高級プリン）もできる約束になっている。依頼者の名前は守秘義務なので明かせない。

何故『嫌がらせ』をするのか、その理由は知らない。ただ私は依頼された仕事をこなすだけだ。

私は標的である男性を見る。

名前は『倉部光司』。

彼は天井裏から覗く私の視線に気付いていない。非常に間抜けな面でベッドに寝そべっており、今し方目を覚ましたところだ。

——今日の仕事は楽に終わりそうだ。

私はつまらなそうに手に持った物を見る。

それはテレビのリモコンである。

そのリモコンは倉部光司の部屋にあったものだ。私は『嫌がらせ』の道具となるものは基本的に現地調達と決めている。証拠をなるべく残さないよう徹底するのがプロと言うものだからだ。

「……！」

倉部光司が目を閉じた。絶好のチャンスである。

音のしないように素早く天井の板を外し、手に持ったリモコンを静かに、それでいて直撃したら記憶が吹っ飛ぶぐらいの勢いで投げつける。

——楽勝だ。

そう思った瞬間、倉部光司がガバッと上半身を起こし、リモコンをかわす。

「！？」

かわされたりモコンは幸いにも枕へと落ち、音を立てることはなかった。しかし、今の絶妙なタイミングでの避け。もしかして私の存在がバレているのか……！？

外した天井の板を早急に戻し、隙間から彼の行動を見守る。

「痛たた……」

倉部光司は年寄りみたいな声を挙げながら再びベッドへと寝転がる。おかしい。さっきの攻撃は当たっていないはずなのに何故痛がっている？まさか気付いていながらやられたフリをしているのか？

私は早鐘を打つ心臓を押さえながら、彼の動向を窺う。

彼が——リモコンに気付いた！

リモコンを取り上げると彼は不思議そうに首を傾げている。しかしそれも数秒の間だけで、すぐに得心がいったようで、そのまま床にリモコンを放り投げた。

——気付いていない？

先ほどの避けたのは偶然なのか？私の疑問は解決しないまま、彼は次の行動に移っていた。

倉部光司は布団を払い、ベッドから立ち上がろうとしている。

迷っている暇はない。今はこの仕事を遂行することに集中しよう。

先ほどは失敗したが、あれはまだ序の口だ。私はこの部屋に侵入した際にしかけておいた罠を発動する準備をする。倉部光司の身長データも調査済みである。手元にある紐を引くと、側頭部めがけて軽い神経毒を塗った画鋏（毒は自前だが、画鋏自体は標的の部屋で見つけたものである）が発射する仕掛けである。そのまま紐を引っ張ると仕掛け自体も回収できる優れた罠で、多少痕跡は残るが生活していてもできる傷と見比べられないほどなのでよしとする。

倉部光司が立ち上がった！

——今だ！

私はタイミングを見計らい、紐を引く。装置から画鋏は発射され、彼の側頭部へと吸い込まれるように飛ぶ。当人の倉部光司は立った姿勢のままわずかの間止まっていた。

今度こそは——！

私は成功を確信し、汗ばんだ手を握る。

「——っくしゅん！」

驚いた。

彼は画鋏が当たる寸前でくしゃみをして、それをまたしても避けたのだ。

彼の頭上を素通りした画鋏は、そのまま反対側の壁まで到達する。壁に掛けられていたコルクボードに、さくっと刺さり、何事もなかったように画鋏としての佇まいを保つ。失敗した時のためにそうなるように調整してはいたが、その画鋏の姿は私を小馬鹿にしているようで悔しかった。

しかし、二度の失敗。

私が今まで仕事をしてきた中で、一度もなかったことだ。

私は完全に彼を侮っていた。

倉部光司とは一体何者なのだ？

私が戸惑っている間にも、彼は行動を続ける。次に彼が向かったのはテレビ台であった。私のいる天井板の位置に背中を向けている。そしてなにやらごそごそと探し物をしているようだった。

くっ、こうなったら！

私は天井から静かにベッドに降り立ち、筒状のプラスチックを取り出す。これは吹き矢の原理

で画鋏を飛ばす道具だ。既に画鋏は筒の中に込めてある。

口元に筒を持っていき、倉部光司の首元に狙いを定めようとする。

が、彼は探し物をしているため、頭があちこちに動き、なかなか狙わせてもらえない。焦りと苛立ちを感じながら、それでも務めて冷静になるよう、私は集中する。

ふと、彼の手が止まった。

どうやら探し物を見つけたようだ。彼の動きもそれに伴い、止まる。止まった。

「——フッ！」

ぱすっ、という軽快な音を立てて、画鋏が筒から放たれた。今度は私が直に狙いを定めたのだ。3度目の偶然なんてあり得ない。

しかし——、

「——っくしょい！」

倉部光司は、またしてもくしゃみで避けた。

脳天を狙った一撃は、彼の頭上の空を切る。画鋏はそのままテレビの傍に貼られたカレンダーへと刺さった。

私の頭は恥辱と屈辱に染まる。人を馬鹿にしたような偶然。この私の『嫌がらせ』を何度も避ける、だと？ふざけるな！

私は既に冷静さを失っていた。

取り出したのは先ほどの筒状のプラスチック。だが、一本ではない。無数に繋がった筒。それはメイン装置に繋がっていた。機関銃のような機構で無数の画鋏を打ち出せる道具だ。今まで使ったことのない最終手段。

私をここまで本気にさせたことを誇るがいい！倉部光司！

ともすれば高笑いをしてしまいそうになるのを何とか飲み込む。これならば簡単に避けることなどできない。そして頭ではなく背中を狙えば、普通の人間では避けることなど不可能だ！

これで——終わりだ！

じゃらり、と音がしそうなほど大量の筒を一気に引き抜くのと同時に、私はメイン機構に息を送り込み、倉部光司に向けて無数の画鋏を発射した。

そして発射して気付く。

倉部光司は今、何をしている？

彼は押し入れを漁り、何かを取り出して、ばさっと広げた。

半纏——！

そのまま倉部光司は半纏に袖を通し、ふわっと羽織る。私はその背中に向けて画鋏を連射したのだ。

ぱすぱすぱすぱすぱす——。

倉部光司の背中に次々と画鋏が刺さる。しかしその攻撃は生地に分厚い半纏に阻まれるため、彼自身は全くの無傷だろう。

私は啞然とする。

なんなんだ、この男は。

すると倉部光司が、きゅっと半纏の紐を締めた。まるで私の首を——。

その瞬間、私は初めて恐怖を覚えた。

ずずっと鼻をすする音に、はっ！とし私は身を隠すために動き出した。隠れる場所、隠れる場所は——！

ベッドの下だ！

下見の時に私一人ぐらいなら隠れるスペースを見つけてある。慌ててプラスチックの筒をかき集め、素早くベッドの下に隠れた。

それとほぼ同時に倉部光司は振り向く。彼は部屋中を歩き始め、なにかを探しているようだった。

まさか、私を——。

焦燥感に駆られる。見つかったら何をされるのか。これでも私は女。男である倉部光司に力で敵わない。恐怖がさらに増す。どうか、見つかりませんように——！

倉部光司の足がベッドの前——つまり私の目の前で止まる。

ドキリと心臓が跳ねる。

マズい、ベッドの下を覗かれたら終わりだ。

祈るように彼の動向を見守ると、彼は足下にあった何かを拾い上げる。その手に捕まれたものは——。

「！」

筒状のプラスチックだった。さきほどかき集め損ねた1本だ。

勘付かれたか！

私は覚悟を決め、彼がベッドの下を覗いた瞬間に目つぶしを食らわせようと用意をする。目つぶしはこの台所で見つけたタバスコだ。いくら男でもこれを喰らえば一溜まりもないだろう。

心臓が鼓動を感じつつ、構える。

が、一向に彼が覗き込んでくる気配がない。あれ？と思っていると遠くの方でカサッという音が聞こえた。あの方向は……ゴミ箱？

「……くっ」

倉部光司の呟きが聞こえ、彼はそのまま音のする方へと歩いていった。足下だけだが、彼がゴミ箱に近づいているのが見えた。

彼はおそらく筒状のプラスチックをゴミと思ったのだろう。これは好都合だ。



私は音を立てないようにベッドから這い出る。倉部光司の方を見ると、彼は予想通りゴミ箱の前に立っていた。

何とも無防備に立っているが、油断はできない。おそらく彼は私の存在に気付いているはずだ。このまま天井裏に隠れてもいいが、それではいたずらに時間だけ過ぎるだけである。なんとかしても彼を仕留めなくてははいけない。

私は携えていたハリセンと強力モータのついた噴出・巻取可能なワイヤーを取り出す。この2つは撃退用と脱出用に用意していたものだ。

ワイヤーを噴出し、天井と2枚の壁が交わる角に刺して固定する。それは丁度私と倉部光司を直線で繋ぐ位置。ハリセンを片手に、私はターザンロープのようにワイヤーに全体重を預け、倉部光司の背中へと迫る。

彼は気付いていないのか。半信半疑ではあったが、勢いに乗せて首を刈るようにハリセンを振り抜く。

が、やはり倉部光司は屈んでそれを避けた。

もう私は驚きもしなかった。冷静に空を切ったハリセンを腰に取り付け、素早くワイヤーを巻き取る。私は天井の角に張り付くような形となった。

彼はさすがに何かに気付いたのか、後ろを振り返っていた。

私は冷静に、努めて冷静になろうとしたが、今の体勢はとても目に付きやすいはずだ。おまけに反撃もできない。この行動にでたのは失敗だったのだ。やはりどこかで焦っていたのである。

自分の失態に冷や汗をかきながら、倉部光司の行動を見張っていると、なんと彼はこちらを向かずにそのまま窓の方へと歩いていった。

またとないチャンス。

私がこの機会を逃すはずもなく、固定されていたワイヤーを抜き、静かに床に降り立つと、カーテンに手こずっている倉部光司に気付かれないようベッドに近づき、空いたままになっていた天井裏へと移動。

天井の板を静かに戻し、倉部光司を改めて観察する。

彼は窓を閉め終わったところだった。

気付かれては……、もうこのことを考えるのは止めよう。だんだん馬鹿らしくなってきた。私は依頼を遂行する。ただそれだけだ。彼が気付いていたとしても、こんな厄介な相手だ。『嫌がらせ』を実行できただけで成功に等しいだろう。

考えを巡らしている間も倉部光司は部屋をうろつく。

まだ何かを探しているみたいだ。

ついには這蹲って部屋の中央にあるコタツの下まで見始めた。すると彼はそのままコタツの下へと這っていった。

しばらく様子を見ていようと思っていた私だが、これはひょっとするとチャンスなのではないか？

天井裏に持ち込んだ数冊の分厚い本。

コタツの下から抜け出す瞬間は無防備になるはずだ。そこを狙ってこれらの本を落とした

ら——。

自分でも妖しげに口の端が持ち上がったのがわかる。

これは——いける！

天井の板を外すと、重量のある本を抱える。

これらの本を落とすのは倉部光司がコタツから頭を出した瞬間でなければいけない。タイミングが重要だ。

さあ、来い！倉部光司！

のそっと、彼が這い出る気配を見せる。

——それッ！

本を手放した。と同時に。

ガタンッ！

「いてっ！」

コタツが大きく動き、彼の体を守るように落ちてくる本の行く手を遮る。

全ての本がコタツに弾かれ、彼の足下に散らばる。

——また、失敗だ……。

もはや私の運の問題なのか。彼が故意にやってるようにも思えなくなってきた私は、そんな風に思ってしまう。

「……ついてないな」

倉部光司が私の心を読んだかのように呟いた。

こいつ……。

まるで私は神を相手にしているかのようなようだった。やることなすこと全て読まれているんじゃないかとさえ思う。そんなの勝ち目はない。

あまりにも理不尽な状況に私は放心しかけていた。

もしかしたら涙目になっていたかも知れない。

天井にぺたんと腰を降ろしたまま、体の力が抜けてしまった。

その後も、倉部光司がベッドに座ったまま何か作業をしていたので、半ば自棄になって『嫌がらせ』を仕掛けてみた。しかし、予想通り、と言ってしまうのも怖い。倉部光司は頭を前後に揺らすだけでそれらを回避して見せた。

自信喪失。

自暴自棄。

私、この仕事、向いてなかったのかな……。

暗い天井裏。闇が私を包んでいるせいか、気持ちが沈む。

「はあ……」

普段なら声は当然のこと、呼吸音も殺すのに、思わずため息をついてしまった。私、頑張ったよね。もう、帰っていいかな？

その時、パチンという破裂音があった。あまりに突然だったので、ビクッと肩を震わせてしまった。

恐る恐る部屋の様子を窺うと、上機嫌そうな倉部光司が部屋を出ていくところだった。

倉部光司の様子が判らないのがとても不安になった私は、天井から降り立ち、そっと部屋から台所を覗き込む。そこにはしゃがんだ彼がいて、手には包丁を持っていた。包丁は鈍く光り、とても良く切れそうだった。

まさか、ね。

ぞくりと背中に悪寒が走る。それと同時に、

「——っくしょう！」

倉部光司が叫び声をあげた。

カツン、と床に包丁が刺さる。

「~~~~ッ！」

声にならない悲鳴を、私はあげてた。

何、何？なんで怒っているの！？

刃物とか、ダメ！そんなのダメ、卑怯だよ！

腰を抜かしてしまった私。

包丁を抜き取る彼。

倉部光司の動きがスローに見える。

いや、来ないで！

彼が包丁を持ち上げた——！

待っ——！

彼はそのまま包丁を元の位置に仕舞い直した。

恐怖で固まっていた私は、予想外の行動に拍子抜けしていた。てっきりそのまま部屋に戻って私を襲うのかと思っていた。しかしそうではないようだ。

腰が抜かし床にへたり込みながら彼を見守る。

彼はまな板を仕舞うと、土鍋をとり出し、米や調味料を用意し始めた。

——料理？

手際よく米を洗い出し、土鍋をコンロに置き、洗った米をそこに流し込む。

そんな家庭的な風景に、寸前まで恐怖の塊だった彼の姿が、とても無害な存在に思えてきた。

私は単に勘違いしていただけかも知れない。

てん、てん、てん、……。

と、私の目の前に何かが転がってきた。

米粒だ。

たった1粒だけど、私の元へと転がってきた。

つまみあげる。

素朴な形。その米粒を見ていると、なんだか腰が抜けていることすら馬鹿馬鹿しくなってきた

。

思わず笑みが零れてしまう。なにやってるんだろう、私は。

彼が戻ってくる前に、早くこの場から離れなくてはいけない。

私は立ち上がると、音を立てずに天井へと戻る。そして彼が部屋に戻るのを待った。

しばらくすると、彼は部屋に戻ってきた。そのまま彼は、何か探し物があるのか引き出しを漁り始めた。よくよく見ていると彼はおでこを冷やすシートを取り出し、そのまま自分のおでこに貼った。熱があるのだろうか。

彼の今までの様子を思い出す。

くしゃみ。

フラフラとした足取り。

鼻をすする音。

半纏。

そして、作っていた料理は恐らくお粥。

……彼は風邪をひいているらしい。

その事実にとり着くと、途端に彼が生きている人間だということを実感した。してしまった。

仕事をしている最中にこんなことを感じるのは初めてのこと。

本来は無用の感情。

恐らく、私はもう……。

指先でつまんでいた米粒を見る。それを彼に向かって投げてみた。

それを彼はかわさずに、コツンと当たった。

そのまま、米粒は彼の足下へと転がっていった。

果たして彼はそれを拾いあげる。

数秒の逡巡があったのだろう。彼は少しの間、その米粒を見つめていた。

すると急に立ち上がって、台所へと走っていった。

まさか、彼はあの米粒を土鍋に入れにいったのか！？

「……………」

言い知れぬ感情が湧く。

貧乏なのに、風邪をひき、その上『嫌がらせ』の対象として私に狙われる。

涙腺が緩み、視界が滲む。

何て哀れな人……！

涙を必死でこらえる。

彼は部屋に戻り、今度はベッドに横になった。風邪なのに動いていたせいか、少々頬が赤い。鼻詰まりのせいだろう、口で息をし、とても苦しそうだ。それなのに彼の顔はどこか満足した、晴れやかな表情に見えた。

苦境でも決して挫けない、そんな意志が伝わってくる。

押さえていた感情はその表情を見た途端決壊し、涙が溢れてくる。

慌てて目元を押さえるが、一滴の涙が落ちてしまった。

それは天井の隙間をくぐり抜け、そのまま彼の頬へと落ちていった。

涙を急いで拭い、すぐさま彼の様子を窺う。すると彼は頬に落ちた涙を指ですくい取っているところだった。

そして、その指を。

えっ——？

舐めた……？

舐めた！

私の涙が。

彼の口に。

私の体液が——。

急激に顔へと血液が流れ込むのを感じる。ぼっぼっと両頬が熱い。

は、恥ずかしい……！

そして、なんか、ひ、卑猥……。

私は隙間から彼を見ていられなくなり、その場から離れる。

落ち着け。落ち着け、私！

深く呼吸をし、バクバクいっている胸に手を当て、動悸が落ち着くのを待つ。

だいぶ落ち着いたところで、最後に深く深く息を吐き出す。

——よし。

これで大丈夫だろう。私は隙間から再び彼の様子を探る。

彼は眠気と闘っているようだ。

時折、キリッとした顔になり、しかし次第にその顔は溶けていき、力の抜けた表情なる。その

繰り返しを数分続けていた。私はついその顔を見いってしまった。面白い動物を観察している気分だった。

やがて彼はベッドから顔を振りながら立ち上がり、台所へと向かっていく。

恐らくお粥の様子を見に行ったのだろう。

やがて両手にタオルでくるんだ土鍋を持って部屋に帰ってきた。雑誌を鍋敷きにし、コタツの上に置く。その大雑把加減はやはり男子と言う感じであった。

彼は再び、立ち上がって台所へ向かい、戻ってくると両手に塩とスプーン、梅干しを抱えていた。

食事の開始だろう。

「いただきます」

そんな声が彼から聞こえた。

私は食事の様子を微笑みながら見守っていた。彼は実に美味しそうにお粥を食べる。私も朝食はまだだったので、その姿にお腹の虫が鳴きそうであった。

彼は綺麗に完食すると、片づけを始めた。そしてそのまま台所へと向かっていく。

彼がいなくなって、はっとする。

私は何をしているんだ。

彼をにこやかに見守っている場合ではないのだ。

私は。

私は彼に『嫌がらせ』をしなくてはいけない。もう既にそんな気分も、気力もないが、これはケジメだ。私は全力を尽くして依頼を遂行しなくてはいけない。そのはずだ。

それが例え彼であっても。

私は、これまでに成功させてきた依頼を思い出す。

冷徹に、冷静に、冷血に、冷酷に。

そうやって私は今まで過ごしてきたのだ。

冷徹に、冷静に、冷血に、冷酷に。

なるんだ、私。

心を極限まで冷たくする。

ゆっくり目を開ける。

——これが最後の仕事だ。

部屋から物音がする。きっと倉部光司が戻ってきたのだろう。

私は隙間から確認する。

彼はパンツ1枚の姿だった。

「きゃっ！」

思わず声が漏れてしまう。わ、私だって一応女の子であって、そんな破廉恥な格好を見てしまえば悲鳴のひとつやふたつあげてしまうのは当然であって。彼の胸筋や鎖骨、二の腕が目に焼き付いて、離れない。見てはいけないものを覗いてしまった、そんな背徳感と言い知れぬ高揚。なんなのだ、これは。

折角心を静めたばかりなのに、再び動悸が早くなる。

落ち着け、落ち着けと再び心を静める作業に移る。

本当に油断のならない人物だ、倉部光司は。

今度こそ、心を冷やしきり、用心しながら隙間を覗く。倉部光司は着替えを終えたらしく、整った格好をしていた。そして財布や携帯電話をポケットに仕舞っている。

マズい。倉部光司は出掛ける気だ。その前に依頼を遂行してしまわないといけない。

倉部光司は仕度を終えたのか、部屋を出ていこうとする。彼はこちらに注目していない。

私は天井からするりと降りる。そして足音を消し、彼の背後に迫る。

腰についていたハリセンを抜き、ゆっくりと近づき、彼の後頭部を狙う。

そして——、ハリセンを振り降ろすために踏み込む。

これが、最後だ。倉部光司——！

ずるり、と。

踏み込んだ足が滑った。

後ろに引っ繰り返りながら足下を見ると、どうやら私はリモコンを踏んだようだ。

そう、最初に投げつけたテレビのリモコン。

彼が床に放り投げたリモコンである。

空中に浮かび、床に落ちるまでの刹那。

「——あ、鍵忘れた」という彼の声が私の耳に届く。

どこか私は達観したのように思った。

——敵わないな。

私は後頭部を床に打ち付け気絶した。



## 2-3(END)

---

「あー…」

俺は思わず唸る。

いかん、幻覚が見える。

でなければこんな女の子が俺の部屋で気絶してるはずがない。

「——……」

それとも何ですか？俺がこの子を知らぬ間に連れ込んで、こんな状況に追い込んだとでも？いやいやそれはまさか、いくら風邪で熱がでていいるからってそんな犯罪じみたことを一切覚えてないなんて言い逃れもいいところだろ。——って、あれ？なんか変だ。

「……」

「……」

「……」

「……おーい」

近づくだけ近づいて、呼びかけてみる。呼ぶだけだ。触れはしない。触れたら幻覚かそうでないかわかってしまうのではないか。幻覚なら即病院に行けばいい話だが、そうでないとなると非常に面倒なことになる。なりそうな予感がする。

——恒例の『嫌な予感』と言う奴だ。

呼びかけに反応することなく女の子はそのまま横たわったままだ。

よし、幻覚と言うことにしよう。

俺は熱で鈍った思考でそう判断すると、忘れ物の鍵を取りに女の子には触れないように部屋に入る。女の子の背格好から推測するに俺とさほど年齢差があるとは思えない。ただハリセンを握りしめている姿はなかなかシュールだ。

これが俺の幻覚であるのなら、なんでこんな姿なのだろう。不思議だ。俺の深層心理はこういう女の子を欲していると言うのか。実に謎である。

鼻をすすりつつ、俺はベッドへと向かう。

俺の習慣として鍵は枕の下に入れている。探す必要もないし、枕の下なら何らかの拍子で動く可能性も少ない。俺の寝相も悪くはないので、最適の場所ではあるのだ。

枕をめくり、鍵を発見する。これで出掛ける準備は整った。

「……」

「……」

さて、あとはこの女の子についてだが……。

ベッドに注目している間に消えてなくなってくれないかと期待してみたが、予想は外れて女の子はまだ気絶したままである。

どうしたものか。

俺は悩んだ揚げ句、ある処置をして病院に行くことに決めた。

「……よし」

これが幻覚なら恥ずかしいが、自分一人が恥ずかしいだけなら全く問題はない。

俺は立ち上がり、玄関で靴を履くと、病院に向かって出掛けた。

……

……

「ん、ん……」

後頭部のズキズキとした痛みを感じながら私は覚醒した。

ここは……。

「!？」

慌てて上半身を起き上がらせる。

そうだ、私は倉部光司を——！

周りを見渡す。部屋には誰もいない。台所にも人の気配はなく、この部屋は『留守』の状態だった。

遅れて記憶のフラッシュバック。

私はリモコンに足を滑らせて、そして気絶していたのだ。

「はあ……」

依頼は失敗に終わった。

報酬は愚か、むしろ依頼者に叱責を喰らいかねない。

しかし、私はそれでもいいと思った。もうこの仕事からは足を洗おう。アイスぐらい自分の小

遣いで遣り繰りすればいいのだ。

若干ではあるが晴れ晴れとした気持ちである。

私は背中やお尻の埃を払い、立ち上がろうとした。そこで『あるもの』が置いてあることに気付く。

——そういえば、彼はあの時こちらを振り返っていたっけ。

私の存在に気付いていないはずがない。間抜けにも気絶して床に横たわっていたのである。それを見逃す人間はそうそういないだろう。

その『あるもの』を拾い上げる。

彼はどういう思考でこれを置くに至ったのだろう。何故だか私は笑いが込み上げてきた。

『見知らぬ人へ

俺の部屋から出る時は鍵閉めていってください。

使った鍵はポストの中へお願いします。』

メモ書きと鍵が置かれていたのだ。

彼は私を物取りやストーカーの類いとは思わなかったのだろうか。こんな不法侵入者を部屋に一人で放置し、その上鍵を置いていくなんて不用心もいいところだ。

本当に——おかしい人物である。

私はそのメモ書きにペンを走らせて、コタツの上に置く。

そして——。

私は彼のメモにあるように鍵を閉めてこの部屋を後にした。

.....

.....

翌日。

熱の下がった少年は叫び声をあげていた。

「な、な、なんてことしちゃったんだああああああ！！」

両手で頭を抱えベッドに転がる彼の手から零れ落ちた紙切れ——メモ書きにはこう記されていた。

『 鍵は頂いた 』

終

## 主人公

---

毎度名前を言うのは飽きるな……。

倉部光司だ。

得意な教科はない。

先日泥棒に家の鍵を盗られました。

お願いします、泥棒さん。

鍵、返してください。

いや、俺の失態ではあるけども。あの時の思考回路は確かに狂ってたけども！

……そういえば、泥棒さんは何しに俺ん家に来てたんだ？

## 風邪-キャラ1

---

私の名前は花崎香織です。

誰？って感じかも知れませんが、倉部光司さんの部屋に侵入した者です。

よろしくをお願いします。

年齢は秘密です。

好きな食べ物、好きな飲み物も秘密です。

大体秘密です。

あ、得意な教科は体育です。

先日、彼の部屋の鍵を頂きました。

別に深い意味はないですよ？

その……記念、ですかね。

あの時の私はすごく頑張ってた。うん。褒めてあげたい。

あまり大きな声で言えませんが、私、人に依頼されて『嫌がらせ』をやっていました。

まあ、今は足を洗って、普通の生活を送ってます。

それもこれも全て彼のせいであり、彼のおかげです。

今度、こっそり部屋に侵入して、ケーキでも置いておきましょうか。

……別に『嫌がらせ』ではないですよ？

『主人公、倉部光司について』

そうですね……。

神が宿ってるんじゃないか、ってぐらいの動きをする人物、という印象ですね。

こっちが凹むぐらいの動きですよ。

あとは、そうですね、意外と不用心な人。

普通は見知らぬ人に鍵を委ねたりしないでしょ？

他は一……。

観察すると面白い人、ですかね。

彼の観察日記でもつければ夏休みの自由課題はきっと満点ですね。

夕暮れ時。

俺は近くのスーパーで食料品を買い、家への帰り道を歩いているところだった。

手には八割ほど埋まったマイバッグ。長ねぎが袋からはみ出してしまっているのはご愛嬌だ。今日は長ねぎが広告の品で随分安く、思わず二本も買ってしまった。帰って早速夕飯のおかずに使おうと思っている。

俺は長ねぎを使ったレシピを頭に浮かべながら、あーでもないこーでもないと考えながら歩いていた。

レトルトの麻婆春雨があったから、アレに加えて食べようか？

それとも鶏肉と一緒に炒めるだけのシンプルなものにしようか？

腹を空かせている俺にはどの料理も美味しそうに思える。早く帰って夕飯にしたいところである。

そうして、帰り道を急ごうと足取りを早めた。

ところが丁度公園の前を通り過ぎようとした時である。

「……うう」

ともすれば聞き逃してしまいそうな呻き声を、俺は偶然にも聞いてしまった。か細い女性の声。とても弱々しいものだった。ここ最近妙なことに遭うので面倒ごとならば遠慮したいところだが、もし本当に非常事態ならば放っておくわけにもいかない。

俺はとりあえず様子を確認することにした。

声のした方角。公園の方へと歩いていく。

買い物帰りのマイバッグさげた男子高校生が公園に立ち寄る様は周りにどう映っていたか知らないが、恐らくロクなものではないだろう。早めに退散したいところだ。

俺はきょろきょろと公園内を見渡す。子供が数人、公園の端のブランコで遊んでいるのが見えた。

その他は特に変わった様子もない。

——良かった。気のせいだ。

俺は割と本気で胸を撫で下ろし、公園を立ち去ろうとした。

振り向き様に、公園の入り口のすぐ傍にあるベンチの後ろで人が倒れているのを視界の端で捕らえた——ような気がした。

汗が体中からだらだら出てくる。

今の、も……気のせい、だよな？

出来れば、いや、絶対気のせいである。そうであって欲しい。

俺は恐る恐るベンチの方を注目する。

「……マジかよ」

そこにはベンチの背もたれに後ろから寄りかかり、ぐったりとした女性がいた。髪は乱れており、表情が窺えない。所々、服が破けており、かすり傷も見て取れる。彼女の周りには新聞紙が散らばっていた。

これは、冗談じゃすまない事態かも知れない。  
俺は女性に駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか……？」

女性は返事をしない。

「お、おい。ちょっと！大丈夫かよ！おい！」

俺は慌てて女性の傍らにしゃがみ込み、肩を揺さぶる。  
すると女性に反応が見られた。

「う……うん……。うるさいよ……」

「う、うるさいって……なあ、大丈夫なのかよ？」

「……ん。……大丈夫って、何が？」

「何って、あんた、怪我してるだろ？」

「え？」

女性は俺の言葉に自身の体を見る。すると表情がみるみるうちに変わっていった。  
俺は彼女との会話が状況とイマイチ噛み合わないことに困惑しつつ、もう一度問う。

「なあ、本当に大丈夫か？頭でも打ったんじゃないか？救急車呼んだ方がいいんじゃない——」

「気絶してた——？まずいわね。ヤツがもう近くまで来てるかも」

「な、なあ。本当に頭大丈夫か？」

「ちょっと、君。何してるの！早く逃げなさい！」

「え、ええ？」

突然の避難勧告。全く意味が判らない。

俺は頭の隅でちりちりとしている『何か』を必死で振り払う。うん、この女性は頭を打っただけだ。きっと救急車が来れば、多少は正常に戻る。うん。大丈夫。



「とりあえず救急車呼びますね。ちょっと大人しくしててください」

「何暢気に携帯取り出してるの！いいから早くこの場から——」

必死で俺を遠ざけようとしていた女性の声が途切れる。

その緩急に俺は119にコールする前の携帯から目を離し、彼女が呆然と見つめる視線の先を見る

。

そこには新聞紙を丸めて作った棒を両手に携えた女性が立っていた。

そこで俺はようやく認めることにした。

——嫌な予感がする。

緩やかに沈んでいく太陽。その日差しは公園を照らし、囲うように植えられた木々の影が長く伸びていく。

そんな公園で、俺は目の前にいる人物を見つめていた。

風貌は二十代の女性。黒い長髪と清楚なワンピースを風になびかせ、こちらに歩いてくる。

その瀟洒な風貌に強烈な違和感を与えているものがあつた。両手に持った、硬く細く棒状に丸められた新聞紙だ。

客観的に見れば実に滑稽な状況である。

滑稽ではあるが、しかし、そう評価するのはいささか安易であるかもしれない。

その理由は歩いてくる女性の雰囲気である。言い知れぬ威圧感と前髪から覗く瞳の冷たさ。靡く黒髪が、黒いオーラを纏っているかのように錯覚させる。

「ちっ……！」

俺が反応しきれずにいると隣の女性が動いた。

彼女は自身の周りに散らばった新聞紙の一部を乱暴に掴み、一瞬にして新聞紙の棒を形成してみせる。対峙する女性の持つ新聞紙より、少し長めの棒だ。それを彼女は剣のように持つと中段に構えた。

呆気にとられつつも、俺は改めて怪我を負っていた女性を観察する。表情には疲れが見て取れる。亜麻色の髪はセミロングで、西日の加減か、黄金色に輝いて見えた。

黒と黄金。

相反するように二人の女性が向かい合った。

俺はその対比に見蕩れていると、金髪——実際は亜麻色の髪——の女性が俺に話しかけてきた。

「何をしているの。ぼけっとしてないで逃げなさい」

「逃げろって言われても……」

二人の纏う雰囲気は確かに異常なほど緊迫していた。

だがさほど危険があるようには思えないのだ。おそらく彼女らが行おうとしているのは、新聞紙によるチャンバラごっこであろう。失礼かも知れないが、子供の遊びに変わりはない。

しかし逃げろと言われてしまつては、立ち去らない訳にもいかない。

彼女の容体は気になるが、おそらくこれから面倒事になるのだろう。関わらない方が身のためである。非常に残念ではあるが、この場は退散することにしよう。実に無念だ。

俺は意気揚々と——ではなく、戦々恐々としながら、立ち上がった。

黒髪の女性は静かにこちらを見つめるだけで、特に反応はみせない。

何かされるんじゃないか、と少し身構えてた俺だが、気を張りすぎてたようだ。俺を見逃して

くれるらしい。

「早くしなさい」

「.....それじゃあ、失礼します」

金髪の方が俺を急かすので、俺は早急に立ち去ることにした。

地面に置かれた俺のマイバッグに手をかける。一応、中身も確認する。先程は慌てたため中身に気を配っていなかったが、運良く無事であった。

安堵もほどほどに、折れていなかった長ねぎに触れようとしたとき。

黒髪の女が弾かれるようにこちらへ飛び掛かってきた。

「——！」

状況を確認している暇もなかった。

目の前まで迫ってきた黒髪の女に、為す術もなく俺は——。

「.....あれ？」

攻撃が、来ない？

そこで思考が状況に追いつく。

俺と黒髪の女との間に、割って入るように金髪の女が立っていた。

なんと金髪の女は水平に構えた新聞紙で、黒髪の二本の新聞紙を受け止めていた。

競り合い、睨み合う二人。

「白草！なんのつもり！？一般人には手を出さないルールでしょ！」

金髪の女が叫ぶ。

その台詞に、黒髪の女はくつつつと笑った。

「はぁ？そんなルール、私が守るとでも思ったの？思うわけがないよねえ、青芝ぁ！だって、そこのガキを逃がそうとしてたもんなぁ！」

「.....くっ！」

「ふふ……！あはははは！あれかなあ？少しは私を信用してた節があったってことかなあ？嬉しいねえ！優しすぎて胸がキュンキュンしちゃうわ！あはははは！」

「あんたってヤツは……！」

「おいおい。意気がるのはいいけど、その怪我。誰にやられたんだっけ？まさか忘れたわけじゃないよねえ！」

「うるさいッ！」

「あははははははッ！」

なんなんだ、この状況は。

頭のねじが何本か吹っ飛んでんじゃないかと思う台詞が飛び交い、アクション映画でも見てるんじゃないかと思う立ち回りをする二人。上下左右自在に攻撃を加えてくる黒髪と、その1つ1つを確実に弾く金髪。公園の乾いた土が舞い、風に飛ばされ落ちた木の葉は二人の新聞紙により粉々にされる。

えええええ！！と叫んでしまいたい。

そんな馬鹿な！！と喚き散らしたい。

いくらなんでも丸めた新聞紙で物は切れないだろ！と世界の常識を教えてあげたい。

そうすれば、なんか俺、開放される気がする。

上手く世の中が回っていきそうな気がする。

「くう！」

「あらあら、どうしたのかしら、青芝さん？動きが鈍くなってきましたよ？」

「あんたの方が速くなってただけよ！」

「あははは！それ、言い訳になってない、よっと！」

「ちい！」

形勢はどうやら黒髪にあるようだ。

そうだ、俺が今やること、やるべきことはなんだ？

簡単じゃないか。

叫ぶことでも、喚き散らすことでも、常識を教えることでもない。

——逃げることだ。

恐らく二人の意識は俺に向いていない。

明らかにチャンスだ。

金髪さんは俺を庇っているようだったし、俺がいなくなれば少しは動きやすいであろう。それに、それ以上に、俺はこの人達に関わりたくない。今までに増して面倒なことが起きそうな予感がある。

そうと決まれば、尻尾を巻いて逃げよう。

チキン？

うるせえ、今晚のおかずは鶏肉に決まったんだ！チキンだっていいだろう！？

俺はなるべく物音を立てずに、マイバッグを抱えて走り出した。後ろを振り向いている余裕はない。全力疾走だ。

何も考えるな。後ろで起きている事に意識を向けるな。夕食の事だけ考えろ。熱々ご飯が待ってるんだ。あー、お腹が空いてきた。早く家に帰って食べたいな。

俺は疾駆する。

公園の入り口は——もう、目の前だ！

ひゅっ、と。

俺の横を高速で横切るものがあつた。

体育のスポーツテスト以来の全力疾走をあっさりと追い抜くもの。それは——。

ドン、と公園の入り口付近の柵に『それ』はぶつかった。

しばらく柵に張り付いていた『それ』は、やがて重力に負け、ぐにやりと地面へと崩れる。

俺は目を疑った。

『それ』は金髪の女だった。

そんな、馬鹿な。

人間が、そんな、飛べるはずがない。

「あはははははは！」

耳をつく笑い声。

黒髪の女だ。

「あーあ、もう終わり？まだ時間はあるってのに、残念」

俺は後ろを振り返る。

肩にかかった黒髪を後ろに払い、冷ややかな笑みを浮かべる女が俺を見据えていた。

「どうしたの？逃げるじゃなかったのかしら？」

「……逃がす気なら、こんなことしないだろ？」

俺は地面に倒れた金髪——いや、もう亜麻色にしか見えないその髪をもった女性を指さす。俺を邪魔するためにこんなことをしたとしか思えない。

「あら、わかってるじゃない。関心ねえ。勘のいい子は嫌いじゃないわよ」

「……」

勘より運が良い方が俺は好きだ。

「さあて。君みたいな勘のいい子はもうわかっちゃってると思うけど——」

——ああ、わかっちゃってるよ。嫌な勘は良く当たるからな。

「——ここで死んでね」

死亡宣告。

とは、少し違うのだろうけども、俺は『今から殺しますよ』と同等の意味を持つ台詞を愉快そうに叩きつけられた。

死刑宣告。

そうだ、それが似合っている。

つまり『死んでくれ』と言われてしまった。

「……死んでね、って。そんなこと軽く口に出していいのか？」

「別にいいでしょ？そんなにキツイ言い方してないし」

「言い方の問題じゃない気はするけどな」

「がたがた言ってる子は好きじゃないわ」

「俺も、死んでくれって言うてくる人は好きじゃないな」

「そう。それは残念」

「別に残念でもないんだろ？」

「ふふ。わかる？」

「笑いながら残念がる人なんていないだろ」

「今ここに初めて誕生したかも知れないでしょ？」

「詭弁だな」

「詭弁ね」

何故俺はこんな会話をしているのだろう。

背後にいる亜麻色の髪の女は未だ動く気配がない。息はしているのだろうか？あれだけ体を強く打ち付けたのだから、ただでは済んでいないと思う。

俺は心の中で舌打ちをする。

この状況はあまりにも異質すぎる。人の生き死にが関わった問題など生まれて初めてだ。しかもそれが他人の事だけでなく自分にも関わっている。面倒事なんて言ってる場合じゃない。

しかし、まあ……。

自分の命を狙う武器が新聞紙というのも情けない話だ。

「なあ、どうやって俺を殺す気なんだ？まさかその新聞紙でか？」

「なあに？こんな武器で殺されるのが不服なの？」

「不服とか以前に、武器って……ただの新聞紙だろ？」

「ええ、そうね。ただの新聞紙ね」

マジかよ。ただの新聞紙だったのかよ……。もっと、こう、不思議な科学的なよくわからない発明が関わってるのかと思ってたのに。

俺の態度をどう受け取ったのか黒髪の女は地面に転がっていた小石を拾い上げる。

「でも、甘く見てると痛い目見るわよ？」

そう言うや否や、小石を俺の方へぽいっと捨てる。捨てられた小石の軌道は俺に当たるものではない。

だが、次の瞬間。

黒髪は一步踏み込むと片手に持った新聞紙を振る。すばっと真っ二つに割れる小石。俺が驚く暇もなく、黒髪は俺との間を一気に詰めた。そして新聞紙を俺の喉元へ突き、寸前で止める。

割れた小石が地面に落ちた。

「ね？」

ごくり、と俺は唾を飲み込む。

これは真面目な話。殺されるかもしれない。

俺は緊張と恐怖に支配されそうになる。

いかん。彼女の雰囲気呑み込まれるな。状況を考えろ、状況を。山ほどあり得ないことが起きている。恐怖やパニックで頭が白くなる前に、『理解できない』と思考を放棄して冷静になるんだ。

そうしていると、黒髪の女は突きつけたままだった新聞紙を引いた。

「ま。簡単にやってしまっってはつまらないしね。少し抵抗する余地をあげる」

そう言うと、二本あった新聞紙のうち一本を地面へ捨てる。

「私、二本使うのが得意なんだけど、ハンデとして一本で相手してあげるわ」

それから、と言いながら黒髪の女は俺の後ろを指さした。

示す先は亜麻色の髪の女。ではなく――。

「そいつのそれ。使いなさい」

亜麻色の髪の女が使っていた新聞紙だった。

俺はマイバッグを脇に置くと、言われた通りその新聞紙を拾い上げる。それは新聞紙とは思えないほど硬い。小さい頃に作った物とは比べものにならなかった。

鉄パイプほどと思われる硬度と新聞紙ならではの軽さ。

俺はそのアンバランスを不気味に思いながら、見様見真似の構えを取った。



「……そっちこそ甘く見てると痛い目見るかもな」

「おお、怖い！」

精一杯の虚勢を張り、俺は黒髪の女と対峙する。  
そして数秒もしない内に飛び掛かった。先手必勝である。

「うおおおおおお！！」

ぶんっ、と振った新聞紙は空を切る。狙ったはずの黒髪が、いない！  
背中に嫌な予感が走り、俺は咄嗟に振り向いて防御の姿勢を取る。

「！」

背中を上段から狙う一撃。それを俺は見事に受け止めることができた。

「へえ。思ったよりやるわね！楽しくなってきちゃった……！」

ニヤリと口の端を持ち上げて笑う黒髪の女。  
冗談じゃない。今のは必然だ。この女がわざと防げる攻撃を放ったに過ぎない。  
そして黒髪の女の猛攻は続く。

頭部、腹部、腕部。どの攻撃も防ぐのがやっとなのであった。反撃のチャンスが到来しても、こちらの攻撃は続かず、形勢は変わることはない。本来はこの二倍の手数であることを考えると怖気がする。

「ふふ。うふふふ！楽しいわぁ！素人がここまで持ち堪えるなんて、君、才能あるよ！」

「そりゃどうも！こっちは命かかってて必死なんでね！」

「ああ、もったいないわ。本当にもったいない！でも助ける気なんてないから、そのつもりでね？」

「あー、そうですか！」

黒髪の女はとても楽しそうに舞っている。  
俺にとっては死の舞。  
それを実に嬉しそうに楽しそうに舞い続ける。

「でも……」

ふと黒髪の女が立ち止まった。

絶対、何かある。俺は次に来るであろう『何か』に対して身構えた。

「もう、時間だから。終わりにしましょ？」

にこっ、笑った彼女は可憐で清楚で綺麗だった。蕾が花開く瞬間のように、果敢無げで美しかった。突然の笑顔に俺は不覚にも見入ってしまった。いや、魅入ってしまった。

その隙に黒髪の女は瞬きもしない間に詰め寄り、俺の持つ新聞紙を弾き飛ばした。新聞紙は宙を舞い、後方に飛ぶ。

その勢いに俺はその場で尻餅をついた。

「あははは。楽しかったわ。ありがとう。命乞いはしないでね？」

そして、黒髪の女は丸めた新聞紙を高く高く挙げ――。

振り下ろした。

俺は俺で、ただ漠然と新聞紙を振り下ろされるのを待っていたわけでない。周りに何か攻撃を防げるものが無いか探していたのだ。そして俺が尻餅をついた場所は偶然にもマイバッグを置いた場所であったのだ。

——マイバッグを使えば攻撃を防げる。

そう判断したとき、既に新聞紙は振り下ろされていた。もう間に合うはずもなく、俺はその必殺の攻撃を受けるしかなかった。

そのはずだった。

俺へ向けられていたはずの攻撃は何故が見当違いのところまで空振りをする。そして黒髪の女は顔に邪悪な笑みを浮かべた。

「青芝あ！」

そう叫ぶのと同じタイミングで俺の前の地面に短く鋭い新聞紙が突き刺さった。

俺はすぐさま振り返る。まさかあれだけのことがあって動いたと言うのだろうか。振り返った視線の先には、肩を荒く上下させ、息絶え絶えながら右手を投げ打つ姿勢で亜麻色の髪の女がこちらを見ていた。

「……一般人には、手をだすなって言ったでしょ？……白草！」

彼女はぼろぼろの体で新聞紙を投げ、俺に向けられた攻撃を中止させた。そうとしか思えない。

何だか涙が出てくる。この人、めちゃくちゃ格好良いじゃん！

「ふふ。まだそんなこと言うの？そんな体で何ができるって——」

「そこの君！」

亜麻色の髪の女性が俺を呼ぶ。

今だったらこの人の言う事なら何でも聞ける気がする。

「そいつには弱点があるのよ！それは——」

「黙れ！！！」

亜麻色の髪の女性が何かを伝えようとしてくれたが、そこに黒髪の女が割って入る。その顔には意外にも余裕が無く、怒りで歪んでいた。

「今君が持ってるその——！」

「黙れって言ってるのが聞こえないの！！」

黒髪の女は地面に突き刺さった新聞紙を引き抜くと、亜麻色の髪的女性に向かってそれを投げつける。正確無比に彼女の鳩尾へと当たり、くぐもった声と共にそれ以降動かなくなった。

俺はどうしたらいい？

ヒントはある。

弱点があること。

俺が所持するものにあること。

それは——。

「ふ、ふふ。あはははは！！これで五月蠅いのは消えたわ！さあ、こんどこそ終わりよ！」

「お生憎様。俺は終わるつもりなんてないよ」

俺は立ち上がる。

そう、両手にはマイバッグを抱えて。

黒髪は少したじろぐ様子を見せたが、その冷たい瞳で俺を睨むと言い放った。

「何言ってるのかしら。ド素人が私に勝つ気でいるの？」

「さあな」

「私は生意気なガキは嫌いよ」

「俺は性悪な女性は嫌いだな」

さて、ここからが本番だ。

俺はマイバッグの中身に手を伸ばす。

「ちょ、ちょっと。何してるのよ！」

「何って武器になるものを探してるんだけど？」

「ふざけないで！武器なら新聞紙を使いなさい！そういうルールよ！」

「ルール？あー、守ってないのは誰だっけな？」

「くっ！」

どうやら当たりを引いたらしい。

俺は『それ』を手に持ち、マイバッグを横に放る。今晚のおかずは変更になりそうだ。

「お前——」

俺は楽しくなって、ニヤリと笑ってしまう。

「長ねぎ、嫌いなのか？」

「そ、そんなわけないでしょ！何を根拠にそんなこといってるわけ！？」

「子供みたいだな……」

「このガキ……！調子に乗りやがって！」

黒髪は怒りで顔を真っ赤に染めているが、一向に攻撃を仕掛けてこない。近づくのも嫌なのだろうか。

俺は両手に長ねぎを持っている。白い部分を手に持ち、心許ない硬さに内心怯えながら、取り出したのだ。まさかここまで効果があるとは驚きである。

ちょっと試しに長ねぎを振って威嚇を試してみた。

「ひい！」

効果覿面である。

「ひい、って。そんなに嫌いだよ」

「~~~~~ッ！」

「でもまあ、これはこれで」

俺は走り出した。

長ねぎを両手に携え、地を這うように姿勢を低くして駆け抜ける。

「いい終わり方なのかもな！」

「く、来るなああああ！！」

頭を抱えるようにしゃがみ込んだ黒髪の女性に、俺は思いっきり二本の長ねぎを振り下ろした。

### 3-5(END)

---

結論から言うと、俺は勝った。黒髪の女性を倒したのだ。

経緯は簡単。振り下ろされた長ねぎは彼女の頭にぶつかると、そこを基点に真っ二つ。折れた長ねぎは飛び散り、ねぎ特有の鼻につく臭いを辺りに漂わせた。

そして、

「わ、私。この臭いダメなの……」

と、先程まで人を見下した態度をとっていた人物とは思えないほどの情けない台詞とともに、黒髪の女はその場に崩れたのだった。

これほどまでにすっきりしない勝ち方があるだろうか。

釈然としない気持ちのまま、折れた長ねぎを両手にただただ佇むだけの俺であった。

「あ、そうだ」

俺は亜麻色の髪の女性の元へ駆け寄る。彼女の容体が気になるところだ。

近づいて抱え起こす。服は破れ、顔には泥がつき、目は静かに閉じられていた。一抹の不安を抱えながら、俺はテレビの医者がやっていた脈取りを見様見真似でやってみた。二本の指で首の頸動脈辺りを押さえてみる。

「……」

トクン、トクンと。脈はあった。口元に耳を近づけると、呼吸音も聞こえる。

良かった。ただ気絶しているだけのようだ。

安堵の息を吐き、俺はその場に彼女をゆっくり寝かす。

そして、気付く。

——俺、この後どうすれば良いんだ？

警察を呼ぶ？いやいや、呼んだとして何をどう説明すればいいんだ。新聞紙振り回されて命狙われそうになったので長ねぎで対抗してこんな状況になりました、と言えればいいのか？……俺が警察だったら馬鹿馬鹿しいと一蹴するな。うん。と言うか、関わりたくない。

警察はひとまず置いとくとして、救急車はどうだろう？理由はどうであれ怪我人がいるのだから、きっと問題ないだろう。呼んでしまえば、あとは任せて帰ればいい。それが妥当だろう。

俺はひとまず携帯で救急車を呼ぶことに決めた。

えーっと、119番、119番。

ポケットにしまった携帯電話を探しあて、コールしようとする。

通話ボタンに手をかけようとした瞬間。

～♪

近くのスピーカーから午後六時を知らせる音楽が流れた。童謡「夕焼け小焼け」のアレンジだ。

突然のことに驚いて、体をビクッとさせてしまった。まったく……音量が大きすぎるとは思わないのだろうか？

驚いてしまった自分の小心を恥じらっていると、俺はそこではたと気付く。

俺と女性二人の周りに人だかりが出来ていた。

「!？」

いつからいたのかわからない。気配もなく、前兆もなく、突然湧いて出たかのようなだった。

俺がその人だかりに驚愕していると、ガサッと物音がする。その方向には黒髪の女がいたはずだ。慌てて視線を向けると、やはり黒髪の女が動いていた。しかも、安々と、何事もなかったかのように立ち上がって、衣類に突いた土や埃を落としていた。

「お、お前……！」

さらに状況は留まることを知らない。

再び物音が聞こえたかと思うと、今度は亜麻色の髪の女性がむくりと起き上がり、腰に手を当てストレッチをし始めた。ぽきぽきと小気味よい音が聞こえる。

もはや動揺するしかない。

「な、なあ、あんた。動いて大丈夫なのか？」

亜麻色の髪の女は答えない。

そして彼女は黒髪の女と視線を交わすと、

二人そろって人だかりにお辞儀をした。

わぁ！っと歓声が湧き、人だかりから拍手が起った。

あ、とか、え、とか言葉にならない声が俺の口から漏れる。状況についていけない。何を言っ  
ていいかわからなかった。

そうして、お辞儀を終えた亜麻色の髪の女が俺に近づいてきた。何をするかと思えば、俺の肩  
をバシバシと叩いてものすごい嬉しそうに笑いながら話しかけてきた。

「いやぁ！君、やるね！突然割り込んでくるから最初は面倒なことになったと思ったけど、良か  
ったよ。リアリティが増した！ありがとう！」

俺がぼかんとしていると、今度は黒髪の女性が近づいてきて、お淑やかに笑みを浮かべてこ  
う言った。

「ええ、本当に！オチは即興だから簡単なものになってしまったのだけど、それでも素人にして  
は期待以上の動きだったわ！ほら、青芝さん。私の判断、間違っ  
てなかったでしょ？」

「まあね。結果的にはそうだったけど、いつもこう上手くいくとは限らないからもう勘弁してね  
？私だって合わせるの大変なんだから！」

「はあーい、わかりました」

うふふ、あはは、と笑い合う二人。

なんだ。なんなんだ。どうしてこうなったのでしょうか？

俺は楽しそうに笑う二人に挟まれ唾然としていると、人だかりが傍によってきて、俺を小突き  
出した。「よかったぞ、少年！」「ちょっと逃げ腰だったけど格好良かったよ」「まだまだ伸び  
しろがあるな」「お兄ちゃん、強いね〜！」「あーあ、俺もやってみたいなあ」「ふん、ただの  
偶然でしょ？」「サインください！」

老若男女、俺を囲い好き勝手にしゃべっている。

おい、誰か説明してくれ。

「あら、そうだった。説明し忘れてたわ」

と、黒髪の女性。

「ごめんなさいね。突然で驚いてるでしょ？私たちはね——」

黒髪の女性は説明を始めた。

説明の内容を要約すると以下の通りだった。

彼女らはこの団地の住民で、時たまこのように新聞紙を使ってチャンバラごっこをしている。  
最初は二人の暇つぶしで始めたのだが、徐々に人気が出て、このようにギャラリーもつくよう  
になった。中には自分もやってみたいと志願するものが出始めたため、ついにはストーリーを



作り、色々な人に色々な役柄を演じてもらいながら披露していた。この催しは夕方六時までと徹底しており、どんなにストーリーが中途半端でもその時間になるば終わるようになっている。

——だそうだ。

「え、じゃあ、怪我したり、倒れてたりしたのは——」

「全部、演技よ」

「さすがに新聞紙じゃ人は死なないよ！」

あはははは！と豪快に笑う亜麻色の髪的女性。

あの、いや、確かに新聞紙じゃ死なないと思いますけど。思いますけど、なんか釈然としない！

だって尋常じゃないスピードで動いてたじゃん。小石、切ったじゃん！盛大に吹っ飛んでたじゃん！！

「あれは、まあ、気合い？」

「やってみれば意外と出来るものねー」

おいおい。

「あ、自己紹介まだでしたね。私は白草茜です。それから——」

「私は青芝夕。よろしく！」

そしてご丁寧に自己紹介までしてくれた。

俺はわなわなと体を震わせてどうしようもないこの気持ちを押しえ込む。

——よし、帰ろう。

帰って夕飯を食べて全て忘れよう。

放置されていたマイバッグとバラバラになった長ねぎを急いでかき集め始める。

「あれ、帰るの？」

「あの一、まだお名前窺ってませんが？」

え、俺ここで名乗らなきゃダメ？

「ダメです」

「ダメだね」

「ダメですか……」

俺は帰り支度を終え、何人いるのかわからない聴衆の前で言う。

「誰が名乗るかーッ！」

言うや否や俺は脱兎の如く駆け出す。いやもうウサギになりきって逃げる。

後ろで何やら騒がしいが知らない。無視だ、無視。

全力疾走で俺は家路につく。

——そうして、今日の夕暮れ時は幕を閉じた。

.....長ねぎ？

ちゃんと美味しく頂きました。

終

## 主人公

---

倉部光司だ。

どうも。

好きな言葉は「戦略的撤退」。嘘だ。

座右の銘を掲げる程の知識が無いので勘弁してくれ。

最近、近所の人と上手くやってける自信がなくなってきた。

俺の知らない日常が広がりすぎてて、もうついていけない……。

……ところで、卵の安い店知らないか？

茜 「白草茜です」

夕 「青芝夕です！」

茜&夕 「二人合わせて——！」

茜 「……何も考えてないんですけどね」

夕 「上手いコンビ名が思いつかなかったんだよねえ」

——自己紹介をどうぞ

茜 「私はこの近くにある大学に通う学生よ」

夕 「私も同じく」

茜 「年齢は言いたくないわ」

夕 「私も同じく」

茜 「大学の近くのマンションに住んでるの」

夕 「私も同じく」

茜 「ちょっと青芝さん。あなたも少しは喋ってくださいよ」

夕 「ほいよー。んじゃあ……。あー、私たちは別にルームシェアしてる訳じゃないよ？」

茜 「そうですね。通ってる大学が一緒だったので、それで知り合ったんですけど」

夕 「そしてまあ、驚いたことに二人とも元演劇部ってきちゃったもんねー。話が合うこと、合うこと」

茜 「そんなこんなで仲良くさせてもらってます」

夕 「私は結構遠くからここに来たからねー。白草と友達になれて良かったよ」

茜 「……なんか恥ずかしいですね」

夕 「よっ！八方美人！」

茜 「それ褒め言葉じゃないでしょ……」

夕 「褒めてないもん」

茜 「！？」

夕 「嘘」

茜 「あなたって人はーッ！」

夕 「あははは！可愛いなあ、白草は」

茜 「不愉快です」

——チャンバラごっこについて

夕 「最初に私が誘ったんだ」

茜 「初めて聞いた時、耳を疑いました。『新聞紙で遊ぼー！』とか何を言ってるのかと」

夕 「『童心に戻れて楽しい』って割とハマってたのは誰かな？」

茜 「ええ、私ですよ？」

夕 「開き直った……まあ、それは置いておいて、徐々に広まったのには驚いたなあ」

茜 「今や一種の祭状態ですからね」

夕 「そうそう祭っぽいね。楽しいは楽しい。けど、ちょっと規模が大きくなってきてるのがなあ」

茜 「責任を負いきれなくなるまで膨らまなければいいのですけど……」

夕 「もともと遊びだからね」

茜 「そうね」

——倉部光司について

夕 「そうそう、倉部。倉部光司！」

茜 「ああ、あの飛び入り参加の素人さん」

夕 「あいつ名乗らずに逃げやがって！今度会ったら取っ掴まえてやる！」

茜 「名前は割れましたからね」

夕 「運が良かったよ。サイン欲しがってた女子高生が知り合いみたいで」

茜 「何者かしらね、彼」

夕 「うーん、さあ？」

茜 「悪い人ではなさそうですけど……」

夕 「変な人ではありそうだね」

茜 「それについてはコメントを控えるわ」

——最後に

茜 「え、彼の居場所を教えて頂けるのですか？」

夕 「あなたも知り合いか何かで？」

茜 「……へえ。あの近辺ですか」

夕 「こりゃ、ラッキーだな。明日にでも訪ねてみようよ」

茜 「まあどうせ暇ですし、いいですよ」

夕 「よし、じゃあ決定！」

## 4-0(OMEN)

---

- 自販機 -

「あ、お久しぶりです。——師匠お！この間の人に来てますよ！」

「こんな立て込んでる時に……ん？おう、あんたか！以前は失礼したな。で、どうしたんだ？」

……

「やりましたね！師匠！」

「倉部。ついに居場所を突き止めたぞ！」

「あ、私、ジュース買っておかないと。倉部くんに返さないとね」

「あたしは……」（もごもご）

「葵ちゃん、帽子帽子」

- 風邪 -

いえ、ですから私はもう足を洗った、と。

え、ケーキ？

……お詫び、ですか。

わかりました。そう言うことであれば引き受けます。

あ、いや、報酬は頂くわけには。

……わかりました。

はい、それでは。今度は成功させて見せます。

- 新聞紙 -

「まずいことになりましたね……」

「ったく。予想以上に面倒な状況だよ……」

「……あ、ついでですし、彼に相談してみるのも手じゃないかしら？」

「んー……なかなか良いアイデアかもね」

「でしょ？」

- 主人公 -

俺は大きな欠伸をし、目一杯の背伸びをした後、立ち上がる。

「.....コンビニ、行くか」

まだ残暑の厳しいこの季節。アスファルトの照り返しで行く先の空気が歪んで見える。空を見上げると、気持ちいいぐらいの晴れ模様だ。太陽は元気に輝き、積乱雲に濃い影を作っている。青と白のコントラストに目をチカチカさせながら、俺は一人歩道を歩いていた。

昼食を終え、満腹による眠気を振り払うのも兼ねて、コンビニへと出掛けたのだ。今はその帰りである。右手に持つコンビニの袋には、今し方購入した商品が入っている。いちご大福と乳酸菌飲料水だ。本来の目的はこの暑さを凌ぐためのアイスを購入することだった。だが、レジ前に並んだいちご大福が『私を食べて……？』と言わんばかりに俺を誘ったのだ。そう来ては俺にどうしようもない。買うしかなかったのだ。

アイスのように溶ける心配もないので、俺はのんびりと歩を進める。きっと俺の顔はほくほくとして嬉しそうに違いない。実際に嬉しい。いちご大福、楽しみだ。

アパートに通じる路地道へと俺は入り込む。コンビニに面する国道より細く、二台の車がすれ違うのがやっとの道だ。ここまでくると民家やアパートが増え、喧騒も次第に小さくなる。そんな道を数分かけて進むと、俺の住むアパートが見えてきた。木造の二階建て。学生の身分には手頃な家賃のそのアパートに俺は住んでいる。部屋は二階だ。

俺のきた道からは、アパートの窓が並ぶ面が見える。玄関は反対側だ。ここに暮らして数ヶ月だがこの光景にはすっかり慣れた。俺は特に感慨も抱かず、そのままアパートの入り口へと入っていた。

アパートの二階に通じる階段の前に立って気付く。何やら騒がしい。同じ階のカップルがケンカでもしているのだろうか。俺は、面倒なことにならないければいいな、とげんなりしながら階段を上がっていく。すると声もはっきり聞こえるようになり、その声音も判別つくようになった。どうやら数人の女性の話し声のようだ。何をしているのやら。

俺は階段を登りきり、玄関のドアに通じる二階の廊下へと出る。人影はない。どうやら部屋の中で騒いでいるようだ。昼間だからまだ許せるが、夜は勘弁して頂きたいところだ。そう思いながら、俺は自分の部屋の前まで来る。

「……」

気のせいだろうか。俺の部屋からその話し声が聞こえる。恐る恐るドアノブに手をかけると、鍵が開いていた。そのまま玄関のドアを開く。そして――。

「きったない部屋だなあ」

「まあ、男の子の部屋ですから仕方ないじゃない」

「倉部くん、エロ本隠してないかしら！」

「ちょ、ちょっと、美樹ちゃん……勝手に漁らない方がいいよ……！」

「エロ本ならその机の引き出しの中ですよ」

「え、ホント！どれどれ……？」



俺は持っていたはずのコンビニの袋が落ちた音で意識を取り戻した。

いかん。あまりの出来事に思考が止まっていた。

玄関の扉からでは中の状況を把握しきれないが、台所と部屋を繋ぐドアは半開きになっており、そこからチラチラと見知った女性の姿を数名ほど捕らえることが出来た。会話の内容からすると、どうやら俺が隠した秘蔵の本を物色中らしい。

なんだ、この状況は。鍵は開いていて、部屋に人は沢山いて、その上物色されていて。それをしている人物達がいくら女性であろうと、これは決して素敵なイベントだなんてことは絶対にありえない。この見覚えのある顔ぶれは特に。きっと面倒事が波のように押し寄せるに違いない。

俺の直感、本能、感覚、それらすべてが警告を発していた。

——関わってはいけない。

あ、そうそう、忘れ物。買い忘れがあったんだ。急いで買いに戻ろう。

「あ！倉部くん！」

俺が踵を返す直前に一番見づらくない奴に見つかった。コイツ、エロ本を物色してたんじゃないのか？

その声に釣られ、半開きになった台所のドアから、ぞろぞろと顔が覗く。

「く、倉部君……」

「おー、案外早かったな」

「お邪魔してます」

「あ、ケーキありますよ？」

俺は玄関に立ち尽くしたまま思う。

——いちご大福。食べている暇はあるのだろうか。

いつもより狭くなった室内。そこには五名の人間がいた。

藤枝美樹。

佐倉葵。

花崎香織。

白草茜。

青芝夕。

よくもまあ、ぞろぞろと揃ってやってきたものだ。

俺は一人でも厄介な人物達を一気に五人も相手にしなくてはいかなかった。女三人寄れば姦しい、と言うがもはや姦しいところではない。五人を落ち着けて事情を聞くまでに、優に三十分は掛かった。

俺が苦勞して聞き出した彼女らの事情はこうだ。

ケース1：藤枝美樹

「この間、ジュース持っていき忘れてたよね？はい、これ」

「お、おう。ありがとう……」

ケース2：花崎香織

「その節はどうも。お詫びと言ってはなんですがケーキを持ってきました」

「ケーキより鍵を返して欲しいのですけど!？」

「それとこれとは話が別です。はい、苺のショートケーキです。皆さんで頂きませんか？」

……飲み物、食べ物を持ってきただけの二人。自由すぎる。

ケース3：佐倉葵

「あたいはちょっと倉部に頼みたいことがあってな」

「頼みたいこと？」

「ああ、『投げ販』関連なんだが——」

「お断りさせていただきます」

「まあ、そう言うなって」

ケース4：白草茜&青芝夕

「私たち、最初は倉部さんのお宅に遊びに行くつもりだけだったんですが……」

「……なんで俺の名前と住所を知ってるんだよ」

「まあまあ、細かいことは気にしない!——でね、ちょっと事情が変わってね。ちょっと相談に乗ってもらいたいんだよ」

「まさか」

「この間、倉部さんも参加されたあのチャンバラごっこ。その関係の話です」

「やっぱり……」

……とまあ、面倒事を持ってきただけの三人。迷惑すぎる。

五者五様の事情を抱えて俺の家に訪ねてきたのはよく判った。

俺はそこまで聞いて、取り合えず落ち着こうと切り出した。いや俺が落ち着いたかっただけである。そして今は花崎が持ってきたケーキを頂くために人数分のお皿を用意している最中だ。ついでにコーヒーも用意している。一応、ここは俺の部屋であるし、不服ではあるが俺のお客さんだ。多少のおもてなしはしなくてはいけないだろう。

彼女らは部屋の中央に置かれたコタツの周りに座っている。不思議とお互いに気が合ったらしく、とても初対面であるとは思えないほど楽しそうに談笑していた。俺が皿を持って現れた時にはすっかり寛いでいた。

やっと用意も終わり、皆でケーキを食べながら話の続きを取り合えず聞いてみる。

最初に語り出したのは佐倉だった。

「あたい達には縄張りってのがあってな。少数グループで数台の自動販売機を相手に自分の技を磨いているってわけだ——」

佐倉の話をもとめるとこうだった。

今日その縄張りに変動があった。縄張りの変動自体は珍しいことではないが、今回は特殊で、名のある『投げ販』が次々と他の縄張りを荒らしているらしい。本来の変動は小規模なものに対し、そいつは広範囲に渡って荒らしているようだ。

「まあ、あたいも噂に聞いただけで、実際に見ちゃいないがな」

「でもそれが、今まで安定していた『投げ販』界に亀裂をもたらすんじゃないかって結構大きな噂なってるのよ！」

藤枝も会話に参加してくる。お前は口の回りについたクリームをどうにかしろよ。

「で、それが俺にどう関係してくるんだ？」

ごくごく当たり前の疑問をぶつけてみる。俺が関わらなくてはいけない要素が今のところ見えてこない。

「んー、それがな。そいつを止めたいとは思ってるんだが……あたいはこれでも名の通った『投げ販』だよ。あたいがそいつをどうにかしてしまうと、そいつの荒らした縄張りを私が奪った

形になっちまうんだ。それじゃ意味がないんだよ」

「もちろん、同じ理由で私も駄目なの。つまりね、師匠は倉部くんにその噂の人物を止めてきて欲しいのよ！」

「そういうことだ」

「なんで俺が……」

「無関係の人間がそいつを止めりゃあ特に影響は出ないんだ。縄張りを奪われた『投げ販』も再び同じ縄張りに居座ることができる。現状維持のまま、事無きを得るってわけさ。倉部はこっちの世界をある程度知ってるし、それにかなりの実力を持ってる一般人だ。うってつけなんだよ」

「いや、そう言われてもなあ……」

「お願い、倉部くん！」

藤枝と佐倉が頭を下げて頼み込んでくる。困った。二人が思っている俺の実力は偶然の賜物だ。決して何度も出来ることではない。

俺が答えあぐねていると、花崎がすっと小さく手を挙げた。

「それなら私がやりますよ？」

俺は思わず耳を疑う。藤枝と佐倉も同じことを思ったのか、目を丸くして花崎を見ている。

「私、これでも暗躍して人の行動を止めるのは得意なんです。ね、倉部さん。貴方にはわかりますよね？」

「お、おう……」

俺の部屋にいつの間にか侵入して気絶してたしな。

「それに話を聞く分には、倉部さんも少しはその『投げ販』に関わっていたんですよ？なら佐倉さんや藤枝さんの手先と疑われてしまうかも知れない。その点、私なら今日知り合ったばかりですし、より安全に終わらせることが出来ると思うのですが」

「なるほどー！」

「でもいいんか？花崎さんよお」

「はい、もちろんです」

なんと珍しいことに俺が巻き込まれずに問題が終わった！ラッキー！

「それに倉部さんには借りがありますから返しておかないといけないので」

「え？」

「なんでもないです。それより白草さんと青芝さんの話でも聞いたらどうですか？」

なんだか妙に機嫌の良さそうな顔をして花崎は話を先へと促す。一方、問題が解決しそうなのに妙に機嫌の悪そうな佐倉。よくわからないが、この話はこれで終わったみたいだ。俺は促されるまま、白草と青芝の話を書くことにした。

「まあ、私らも似たようなことなんだけどね」

と、青芝が切り出す。

白草と青芝が語り出したのは以下のようなことだった。

チャンバラごっこ。それが結構な規模になっていることは以前二人から聞いたが、ついに問題が起きたらしい。その問題とは若い男性達が力任せに新聞紙を振り回していることだ。それも周りも顧みず、わりと乱暴に、だそうだ。まだ大事にはなっていないが、この先暴走しないかと心配している、とのことだ。

「それで、遊びに行くついでに倉部さんに相談してみよう、という運びになったのです」

「何か良いアイデアはないかと思ってね」

なるほど。と、簡単に納得は出来ないが、話の内容はわかった。

「良いアイデア、ねえ。俺が思いつくとしたら、その問題が起きた原因をどうにかするのはどうか、っていうことぐらいだけだな」

「原因はわからないのよ。なんだか急に熱が入っちゃったみたいなのは確かなんですけど」

「どうしちゃったのやら。私にはわからんよ」

俺も頭を捻って考えてみるが、これ以上のアイデアは浮かばない。三人して、うーん、と唸っていると、ずっと手が上がった。

「それならあたいがなんとかしてやるよ」

今度は佐倉だった。

「なんとかって……。良い策でもあるのかよ？」

「まあな。男って奴はたいてい単純な思考で動いているもんさ。ちょちょっと弄ってやればころっと態度変えるってことよ」

男を目の前にしてその台詞を吐けるとはいい度胸をしている。

「それじゃあ、佐倉さん。お願いしてもいいかしら？」

「まかしときなって！」

「ありがたい！頼んだよ、佐倉さん」

驚くべきことに二つ目の問題も俺が巻き込まれずに済みそうだった。面倒事は互いに相殺するのだと今日新しく学んだ。

その後、五名の女性達は互いの情報を交換し合い、特に花崎と佐倉は標的となる相手の情報を丹念に聞いていた。その間俺は蚊帳の外だったが全く問題ない。俺は面倒事を目の前にして、特に巻き込まれることはないのだ。なんだか新鮮な気分だ。いっそ清々しい。

一通り話がついたのだろう。佐倉と藤枝、そして佐倉が立ち上がり行動に移ろうとしていた。別れの挨拶もそこそこに三人が立ち去ろうとした時、シンプルな着信音が鳴り響く。

「はい、もしもし」

それは花崎の携帯だった。彼女は俺達の目を全く気にせず、普通の調子で電話相手と会話をした。

「はい。……ええ、例の件は滞りなく。はい」

よどみない受け答え。仕事の出来るOLさんはこんな感じなのだろうか。

「どうされました？……え？それは一体——」

花崎の対応が徐々に変化していく。ときおり俺の顔をちらちらと見られた。話の内容が人に聞かれない話題に変わったのだろうか。

「……ですから、この間も言いましたが、既に手を引いた、と。……何度頼まれても返事は変わりません。諦めてください」

語気を強めて花崎が言う。すると俺の耳にも聞こえるほどの怒声が携帯から聞こえた。花崎は携帯を耳から遠ざけ、様子を窺った後、再び携帯を耳に近づけた。

「……切れてしまいました」

花崎が携帯をしまう。そして大きなため息をついた後、とても申し訳なさそうに話し始めた。

「すみません。どうやら佐倉さんのお手伝いが出来そうにありません」

「どうしたんだよ、急に」

「私が暗躍するのが得意と話しましたよね？それは以前私が行っていた仕事に関係するんです。

内容は言いたくないので省略させていただきますが、依頼主がいて成り立つビジネスでした。今はもうその仕事から退いたのですが、今電話を掛けてきた相手が最後に依頼してきた人物なんです」

「それで？」

「退いた事を説明したのですが、どうしても追加の依頼したいと頼み込んできて。皆さん聞いていたと思いますが、強く断ったところ、『許さない。いつか報復してやる』と恨み言を言われてしまいました」

「……完全に逆ギレね」

「そんなわけで、急遽その依頼主を決着をつけなくてはいけなくなりました。こればかりは先延ばしにすると後々面倒なので、早めに処理しなくてはいけないのです。佐倉さん、申し訳ありません」

そう言うと律義に花崎は佐倉に向かって頭を下げた。

「いや、気にするな。他を当たればいいからな」

佐倉は俺をチラッと見る。ヤバい、矛先が俺に向いた。なにか良い回避策はないかと思っていると、意外なところから助け船がやってきた。

「ねえ、花崎さん。それって誰かに代わりを頼むことって出来るのかしら？」

白草だ。

「……まあ、依頼主を説得できれば誰でもいいのですけど」

「じゃあ、私たちが引き受けましょう」

彼女は毅然とした態度で言った。その言葉に驚いたのは花崎より、青芝の方だった。

「え、『私たち』って私も入ってる！？」

「当たり前じゃないですか。青芝さんだってやるつもりだったのでしょうか？」

「まあ、否定はしないけど」

「——と言うわけです。花崎さん。どうですか？」

「代わって頂けるならご好意に甘えます」

「ありがとう。私たちだけ何もしないで頼りっぱなしというのも申し訳ないと思ってたところでしたの」

なんと、まあ、なんと。今回の問題もまた、俺が巻き込まれずに済んだ。

白草と青芝の申し出により難を逃れた俺は状況を頭の中で浮かべてみる。佐倉・藤枝の問題を

花崎が、花崎の問題を白草・青芝が、白草・青芝の問題を佐倉・藤枝がそれぞれ請け負ったのだ。見事なサイクルである。こうやって人は互いに助け合い、支え合っているのだろう。

俺は感心しつつ、心の隅の方では俺は何もしなくていいのかという考えが浮かんでいた。いいも何も俺はそういう面倒事を避けて来たのである。なるべくしてなったのだ。何も気にすることはない。

そう思いつつも少し心にしこりを感じながら、俺は彼女らを見送ることにした。再び打ち合わせをしていた五人の女性は、各々の役割を確認すると、部屋を後にしていく。

「またね、倉部くん！」

「それじゃあ、倉部」

「お邪魔しました」

「またお会いしましょう」

「じゃあなー」

彼女達はあっという間に立ち去っていった。

台風一過という感じだろうか。部屋の中が妙に静かに思えた。俺は腰を下ろし、コタツの前に座る。そしてふと思う。

——嫌な予感がする。

嵐が過ぎ去ったはずの、午後のひととき。

俺は自分の感じる不可解な予感に頭を捻るのだった。



花崎香織はとある住宅街の一角にいた。

彼女は電柱の影に身を隠し、息を殺している。その視線の先には一人の男性がゆっくりと歩いていた。

彼だろうか？

花崎は佐倉と藤枝から聞いてた人相と彼の特徴をじっくりと照らし合わせる。

男はひょろっとした体躯で、とても力があるようには見えない。目の下には隈があり、顔色も白く、健康状態はあまりよく無さそうだ。そんな弱々しい印象の彼に似つかわしくない点がひとつ。両手に装着されたごてごてとした革の手袋だ。手袋は良く使い込まれているようで、所々すり切れている。特に指先の損傷はひどいようだ。

……間違いない。花崎は確信する。佐倉が言っていた各地の縄張りを荒らしていると言う、噂の『投げ販』だ。

確認を終えた花崎は音もなく電柱の影から身を躍らせる。男の死角、背後から影のようにすすーと近づく。男は全く気付いていない。そして。

「動かないでください」

花崎は男の後ろから声を掛けた。

背後からの突然の呼びかけに驚いた男は振り向こうとするが、花崎がそれをさせなかった。男の背中に硬いものをぐっと押し付ける。

「動くな、と言ったはずです」

冷たく、身を切るような静かな声に男は動きは完全に止まる。男の頬に汗が伝い、バクバクと心臓がなる。ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

「だ、誰なんだ」

「私の質問にだけ答えてください」

花崎は静かに対応する。

彼女の放つ体の芯まで冷やすようなプレッシャーに男はそれ以上の追求をやめた。

「では質問です。あなた。『病み上がりのジョージ』と呼ばれたことはありますか？」

『病み上がりのジョージ』。

いつも具合の悪そうな顔をして歩いている『投げ販』の通り名だ。彼自身は至って健康らしく、普段から『投げ販』に勤しんでいるため『病み上がり』という名を冠したようだ。そして、今

回の縄張りを荒らしていると噂されている人物の通り名でもある。

花崎の質問に、男は目を見開き、慌てたように言う。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺の話聞いてくれ！」

「……私の質問に教えてください」

男の慌てぶりにも動じず、花崎は続ける。

「『病み上がりのジョージ』で間違いはないですか？」

「……あ、ああ。そうだ。認める。俺は『病み上がりのジョージ』だ」

ジョージははっきりと断言する。そして、続けざまに言う。

「あんた、『投げ販』の縄張り関連で俺を訪ねてきたんだな？」

「……それが何か？」

花崎はジョージの背中に当てている硬いものがさらに強く押し込む。ジョージの口から「ひっ」と声が漏れた。

「お、お、落ち着けて！俺はただあんたが勘違いしてるってことを言いたいだけだ！」

「？ どういう意味ですか」

花崎はジョージの言葉に眉をひそめる。勘違いをしている？一体何を？

「俺は確かに『病み上がりのジョージ』だが、縄張りを荒らしたりなんかしてねえ！根も葉もないデタラメだ！」

「何を言い出すかと思えば……」

花崎は呆れた。土壇場の苦しい言い訳にしか聞こえなかったからだ。

だが、ジョージは尚も続ける。

「嘘じゃねえって！俺は何もやっちゃいない！たまたま俺の縄張りの周りで事件が起きたただけだ！今だって、噂をしている『投げ販』達の誤解を解くために歩き回ってたんだ」

「……」

「信じてくれよお……」

この場を凌ぐための嘘。という方が信じやすいが、ジョージの語調には悠揚迫らぬ感じがあ

った。花崎は判断に困る。この男を信じてもよいのだろうか？

「……証拠は？」

「ない。だが、俺がやったという証拠もない」

確かに、花崎が話で聞いてたいのは『病み上がりのジョージが縄張り荒らしだ』という噂のみ。確固たる証拠というものを佐倉や藤枝からは聞いていない。

「そ、そうだ！」

「なんですか」

「俺にジュースを買わせてくれ！」

「……」

「頼む。『普通』に購入するから！……あんた、この意味、わかるよな？」

「……わかりました」

花崎はジョージを自動販売機の近くまで連れて行き、『普通』にジュースを購入させた。ゴトン、と落ちたジュースを取り出したジョージは花崎に問う。

「……これで信じてくれるか？」

「ええ、いいですよ」

花崎はジョージの背中から硬いものを離す。ジョージを気が抜けたように肩を落とした。

花崎が彼の言い分を信じたのには訳がある。元々、佐倉と藤枝からジョージの屈服をさせたという証明として、『普通』にジュースを購入させること必要があったのだ。『投げ販』にとって自分の磨き上げた技を使わず、『普通』にジュースを購入することは自分の顔に泥を塗るのと同じこと。プライドの高い『投げ販』には屈辱に等しい行為なのだ。

それをやり遂げてしまった以上、彼の言葉には嘘がない。そう判断せざるを得なかったのだ。

「すみませんでした。突然、背後から襲ってしまって」

「い、いや。いいよ。特に気にしてないし」

青白い顔を歪ませるように笑うジョージ。こんな成りだが実はかなり優しい人物なのかも知れない。花崎は密かにそう評価しつつ、唇に指を当て呟く。

「……それでは一体誰が縄張りを荒らしているのですかね」

「それについては、俺も調べてたんだ」

ジョージは目をカッと開いて花崎を見る。おそらく真剣な表情になっているのだろう。が、少

し怖い。

「そうしたら目撃情報を入手したんだ。まあ物的証拠はないんだけど」

「目撃情報？」

「ああ。さっき、誤解を解いて回ってるって言ったろ？そのときに得た情報なんだが……」

「誰の仕業か判ったんですか？」

「完全にじゃないが名前は判った。そいつが着ていた服に名字が書かれていたらしいんだ」

「……」

「そいつの名は——」

花崎は顔をしかめた。

佐倉葵と藤枝美樹はとある公園の敷地内にいた。

佐倉はウェスタンハットを目深に被り、無言で立っている。藤枝は制服のスカートを揺らしながら、キョロキョロと辺りを見渡していた。

「うわー、男の人がいっぱい」

藤枝は、ははーと呆けた声を挙げた。

藤枝の言う通り、公園には20代から30代ぐらいの若い男性が十数人いた。そして彼らは何やら大声をあげながら、激しく動き回っている。土埃が舞い、汗が飛び散る。子供の遊び場や休憩所としての色が強い、そんな公園ではあまりお目にかかれない光景だった。

「あいつらか」

佐倉はゆっくりと視線をやり、今も尚動き回っている男性らに鋭く眼光を飛ばす。

藤枝は頷く。

「多分そうだと思いますよ、師匠。私、あの中の何人かと会ったことがありますもん」

「え？」

佐倉は藤枝の意外な回答に思わず聞き返す。

「あ。私、ここに何度か来たことがあるんですよ。その時に見かけたんですけどね」

そう言えば、と佐倉は思い返す。藤枝と白草&青芝ペアは知り合いのようだった。どういった経緯で知り合ったかは佐倉にはおおよその検討をついてはいた。粗方、藤枝が自分から寄っていったのだろう。この娘はとても人懐っこいのだ。子犬のように愛くるしい。なでなでしてあげたくなる衝動はきっと誰にでも沸き起こるだろう。

「師匠？」

藤枝の声に佐倉はハッと意識を取り戻す。

「あ、あー。なんでもねえ」

「？」

小首を傾げる藤枝。

佐倉は思う。この子には悪い虫がつかないように自分が注意してあげなくては、と。

「ところで師匠！やつらをどうしますかねえ！どう料理してやりましょう！」

……。

佐倉は思う。きっと藤枝ならば一人で大丈夫だろう、と。素早い思考の切替えだった。

遊んでもらえるのが嬉しいと尻尾を激しく振る犬のように、爛々と目を輝かせている藤枝をなだめつつ、佐倉は言う。

「藤枝。お前、あいつらと知り合いなんだよな？」

「はい！でも大丈夫です。師匠と一緒になら知り合いだろうがなんだろうがぶっ飛ばせます！」

「い、いや、別にそこまでしろって言ってる訳じゃ……」

「ぶっ飛ばさないんですか？」

「まあな。あいつらなら話し合いで何とかなるんじゃないかな」

「そうですか……」

藤枝はしょんぼりと肩を落とす。そんなにぶっ飛ばしたかったのだろうか。

「まあ落ち込むなって。藤枝にはやってもらいたいことがあるんだから」

「え。な、な、なんですか師匠！」

「あいつらとネゴシエーションしてもらえるか？」

「ね、ねご……？」

「交渉だよ、交渉。あいつらだって理由もなく暴れている訳じゃないからな。あたかも検討はつけてはいるが、ちゃんと話を聞いた方がいいだろ？」

「交渉、ですか」

「まあ、気い張らずに世間話をしてもらえれば充分」

「……わかりました！師匠の頼みですもん。ちゃんとやってみせます！」

藤枝は気合いを入れるように肩に手を当て、腕をグルグルと回す。佐倉はそんな藤枝を見守りながら柔らかい表情になっていた。

そして。

「すみませーん！お話しませんかー！」

藤枝は大きな声を上げて、男達を呼び止める。かなりボリュームのある声ではあったが、しかし男達は依然として動き回っている。手には新聞紙を持ち、咆哮をあげ、互いにぶつかり合い、凌ぎを削っていた。

「……」

くると佐倉の方へ振り向いた藤枝は、口をへの字にして目を潤ませていた。そして再び男達の方に向き直ると、先程より声を張り上げて呼びかける。しかし、それも男達の耳には届かないのか、彼らは長い台詞を吐き、地を削り、空を裂き、新聞紙を思いっきり振り回していた。

確かにこれは近所迷惑かも知れない。

藤枝の呼びかけに答えない男達に佐倉はイラっとしてきていた。

「し、師匠お！」

ぱたぱたと走ってきた藤枝は佐倉の胸に飛び込む。佐倉は可愛い弟子の頭を撫でながらついに動き出す。どこからともなく取り出したコイン。本来、彼女ら『投げ販』は自動販売機に対して硬貨を投げ入れる時に真価を発揮する。が、今回は特別だった。

「……無視は良くない、よな？」

その頃、男達の戦いはクライマックスを迎えようとしていた。彼らは互いに間合いをとり、大きく円状に広がっていた。一人の男が何かを言い放ち、腕を大きく振りながら主張をする。数名の男がそれに反発するように声を挙げ、やがて沈黙が訪れる。その沈黙の中、彼ら一人一人が自分の武器である新聞紙を握り直し、己の力を再確認する。そして――。

「「「「うおおおおおおお！！！！」」」」

彼らは全力を賭け、円の中心、全員がぶつかる地点へと走り出した。  
と、同意に。

その円の中心。全員がぶつかる地点が大きく爆ぜた。

土柱が大人一人分は余裕で越す高さまで上がり、地面は深く抉り取られ、その衝撃で辺りに風が吹き抜けた。男達にとっては予期せぬ出来事。完全に予想外の展開に目を白黒させて、全員がその場に立ち止まる。

そして。

「おい、あんたら。うちの弟子の話聞いてやってくんねーかな？」

佐倉は左腕に藤枝を抱え、右腕を目一杯伸ばした状態で、男達に言い放った。

.....

「いやぁ、申し訳ないっす。俺らつい夢中になっちゃって」

暴れていた男達の一人がそう言った。

佐倉は腕を組みながら話を聞く。話をするのは藤枝が担当だった。

「ホントにもう！私、結構叫んでたのよ！」

「すみません.....」

「まったく失礼しちゃうわ！」

ぷんぷんと効果音が出そうなほど、怒りを露にする藤枝。

「とにかく。なんでそんなになって暴れてたの？」

「別に暴れてたわけじゃないっすよ」

「.....」

「すみません、暴れてました」

「だから『何で』なの？」

「それは.....その」

イマイチ歯切れの良くない男に佐倉は助け船をだしてやることにした。

「どうせ、あの白草、青芝がらみだろ？」

「！」

「どうなんだ？」

代表で話していた男も、周囲にいた男性陣もさっと顔色を変える。妙に落ち着きの無い、そわそわとした様子だ。むしろもじもじといった体だった。

鋭い佐倉の眼光にやがて観念したように男が語り出した。

「いや、その、これ、内緒っすよ？」

男達が暴れていた原因はこうだった。

団地で噂になっている白草と青芝。彼女らの演ずるチャンバラごっこは実に素晴らしく、そして魅力的だった。その上容姿端麗な二人である。二人に少しでもお近づきになろうという気持ちが日々募り、そしてついに彼らは『チャンバラごっこを練習する会』を発足し、公園で練習を励



んでいたのだ。結果、それが白草と青芝の悩みになってしまっていた事を知らずに。

全てを聞き終えた後、佐倉は白草と青芝から止めるように頼まれたことを男性達に伝えた。そして、今後も続けるのであれば周りへの配慮を忘れないように、と付け加える。

佐倉の話（特に白草と青芝の件）を聞いた彼らはとても落ち込んでいるようだった。申し訳なさが滲み出ている。

「俺ら、本末転倒なこと、してたんすね……」

それに見かねた佐倉は言う。

「心意気は悪くねーから、落ち込むなって。ただ空回りしすぎただけって話だろ？」

藤枝も佐倉に続く。

「そうだよ！修行は良いことなんだからね？そのうち努力してれば認められる日も来るわよ！」

それを聞いた男達は微妙な表情になる。励まされたのを素直に喜んでいいのかわからないようだった。佐倉と藤枝は手応えの無さに互いに顔を見合わせる。その様子に気付いた代表の男は口を開いた。

「俺ら。この会開く切掛けがあったんすよ。……昨日、ある人が夕暮れ時の公園に現れて、たまたまつるんで俺らに声を掛けてきて。なんだったんすかね。あいつ、俺らにこういったんすよ？」

男は一呼吸おく。

「『お前らじゃ何時まで経ってもあの二人には辿り着けない』って」

男は熱を込めて言う。

「その言葉聞いて、怒りよりも悔しさが湧いてきちゃって。こいつの言いたい放題にさせとくのは悔しい、ムカツクって。それで見返そうって俺ら話し合って、こんなこと始めたんすよ」

はは、と自嘲する男。

「まあ結果あいつの言う通り、うまく行ってなかったんすけどね。今ごろあいつも笑ってますよ」

話を聞いていた佐倉は男に問いかける。

「……そいつは誰なんだ？」

「佐倉さんが聞いてもわからないかもですけど、藤枝さんならわかるかもしれないっすね」

「だれだれ？」

「あいつですよ、あいつ——」

佐倉と藤枝は目を見開いた。

白草茜と青芝夕はとある廃ビルの1フロアに居た。

白草と青芝は並んで立ち、埃っぽいただ広だけの部屋の中央に視線を向けていた。彼女らの視線の先、部屋の中央には1つの椅子がある。その椅子に腰をかけているのは、廃ビルとはとても縁があるとは思えない、制服をきた普通の女子高生だった。

白草が口を開く。

「納得して頂けたでしょうか？」

女子高生はフツと鼻で笑うと、白草を睨め付けた。

「納得いくわけないでしょ？花崎に報復する。それは変わらない」

彼女はそう言うと、足を組み直し、背もたれに体重を預ける。

そう、この女子高生こそが花崎に『仕事』の依頼をした人物である。

にんまりと嫌な笑みを顔に貼り付け、彼女は言う。

「あはは、どんな報復がいいかなあ！郵便受けに大量の松ぼっくりと詰めるとか？ドアノブに納豆塗り付けるとか？玄関の覗き穴をガムで塞ぐとか？あー、どんなのがいいんだろお？」

けたけたと笑う女子高生。

白草はぎりりと奥歯を噛む。なんて地味な嫌がらせなんだ。決してそんなことはさせてはいけない。白草はさらなる説得を続けようと口を開こうとした。

しかし、それを手で制した人物がいた。

青芝である。

「それにしても余裕だねえ。この場所にいることだってそうさ。花崎さんに『報復する』なんて言ったら、彼女はそれを止めに来るに決まってるのに。わざわざこんな場所に隠れもせずに残って、私らを招き入れて、のうのうと笑い話までしてくれて。もしかして、あんた馬鹿なの？」

青芝の言葉に女子高生の顔からは表情が消え、笑いが止まった。しかしそれもほんの数秒のことだった。再び口の端をあげ、吐き捨てるように語り出した。

「はっ、そんなのわかってるつーの。ま、さすがにあんた達みたいな素人が来るとは予想は出来なかったけど。……もしかしてえ、花崎は私が怖くて来れなかったのかなあ？あははは、傑作！」

青芝はうっすら笑みを浮かべながらも、目を鋭く細め、女子高生を睨む。

「私らも舐められたもんだねえ」

「あ、青芝さん！もう挑発はやめてください！」

「あらあら、白草さん。あなたはこの頭も胸も薄っぺらな女子高生がまだ説得に応じてくれる余地があるとでも？」

「そ、それは……その」

「ま、私は最初からこの女が説得できるとは思ってなかったけどね。白草は律義に説得しようと努力しちゃうんだもん。可愛いよねえ」

「か、可愛いって……状況を考えてくださいよ！」

「またまた照れちゃって。初奴じゃのう」

「青芝さん！」

「……冗談はさておき、こいつには少しお灸を据えないといけないようだね」

青芝は女子高生を見やる。白草も青芝にならい、女子高生へと顔を向ける。視線を向けられた彼女の顔には笑みはなく、ただ無表情だった。

「……話は終わった？あなた達も余裕じゃん。何故私がこんな場所に残ったか。何故こんなに余裕なのか。そーゆーの考えなかったわけ？馬鹿じゃない？」

「……こいつ、結構根に持つタイプだな」

「あ、青芝さん。聞こえてますよ」

「ふふ、あははは！うけるよ、あんた達！……もう、いい。あんた達、消えて？」

女子高生は言い終わると、指をパチンと鳴らす。

すると部屋の入り口から、黒のスーツにサングラスの出立ちをした集団がぞろぞろと現れる。そして数秒のうちに白草と青芝の周りを囲んでしまった。

「なんなりとご命令を」

リーダーと思しき男性が、女子高生の前に綺麗な姿勢で立ち、深々と頭を下げる。

その態度に満足いったのか、女子高生は実に愉快そうに男性に向かい命令を言い放つ。

「そこの頭と胸に無駄な脂肪しか詰まってない女達に少しお灸を据えてあげて」

「……やっぱり根に持つタイプじゃん」

「しーっ！」

命令を受け取った男性はもう一度頭を下げると、白草と青芝のほうに向き、彼女らを囲んでい

るスーツ集団に目配せをする。彼らは頷くと、じりじりと彼女らににじり寄る。白草と青芝は背中合わせになり、近寄る男達に警戒しつつ会話をする。

「さすがにこの展開は読めなかったなあ」

「青芝さんが下手に挑発するからですよ！」

「だって」

「だってじゃないですよ！」

青芝の頬に汗が伝い、白草はごくりと喉を鳴らす。

その様子が面白いのか女子高生はけたけたと腹を抱えて笑う。そして。

「さあ、さっさとやっちゃって！」

女子高生の号令が室内に反響した。

……

数分後。

床に横たわる人物達。

椅子に座る人物。

部屋に立ち尽くす人物達。

全てが終わったいた。

座っている人物——女子高生は口を歪ませながら、倒れた人物達を見下ろす。

「あは、あはは、あははははは！」

狂ったように声をあげる。

そして、室内で立っている人物達の一人が静かに口を開いた。

「こいつ、大丈夫かな？」

単純な疑問にもう一人の人物が答える。

「さ、さあ。どうなのでしょう？」

立っている人物達——白草と青芝は心配そうに女子高生を見つめる。

見られていることに気付いた女子高生は、ひっ、と喉を震わせ、震えた声で喋り出す。

「な、なんなの、あんた達！絶対おかしいって！そ、そんな新聞紙で……」

白草と青芝は顔を見合わせ、困ったように肩をすくめる。おかしいと言われようが、出来るものは出来てしまうのである。

「ねえ、ちょっと。そこで寝てるあなた達！演技なんですよ！聞いてないよ、そんなの！」

床に伏している人物達——スーツ集団は女子高生の必死の呼びかけにも反応せず、そのまま倒れている。彼らは気絶しているのだ。

「さて、と」

不意に、青芝が意味あり気な声をあげた。片手に持った新聞紙をひゅっと振り降ろす。まるで刀についた血糊を落とすかのようにだった。

それをみた女子高生は顔を真っ青にして椅子から立ち上がる。勢い余り、ガタンと音を立てて、椅子が倒れた。椅子に何かの書類が挟まっていたのか、バサッと紙が床に散らばる。

「まあまあ、落ち着きなって。私ら、ちょーっとお灸を据えるだけだから」

青芝が丸めた新聞紙を肩にトントンと叩きながら近寄っていく。

「ちょ、ちょっと待って！お願い！私じゃないの！」

「？ 何言ってるんだ？」

「だから、私じゃないんだってば！」

今にも泣き出しそうな顔で「信じてよお……」と言い続ける女子高生。

青芝は怪訝な顔をしながら、なおも近づこうとして白草に制止された。

「ちょっと待って、青芝さん。……あの、『私じゃない』ってどういうことなんですか？」

すん、と鼻をすすりながら女子高生は話し始めた。

「私、ある人に花崎さんに依頼をしてくれって頼まれて……言ってみれば仲介役かな……でも、あくまで私が頼んでいることにして、その人の存在は絶対に知られたら駄目だ、って……おかしい依頼だとは思ったんですけど、結構報酬が良くて……それに細かな指定があったから、それを

なぞるだけなら簡単かなって引き受けたら……こんなことになって……」

目にいっぱい涙を浮かべ、女子高生は続ける。

「『報復する』って言ったのだから、その人からの指示で……この、スーツの人達だって、その人が連れてきたんだから……この人達に任せれば大丈夫だって……本当だよ……だって、考えてみてよ？女子高生でこんな人達従えてるわけじゃない！……お願い、信じて……」

そう言うと、ついに女子高生は泣き始めてしまった。嗚咽を漏らす彼女を、白草と青芝は困り顔で見つめる。

「どう思います、青芝さん？」

「うーん……」

「私は信じてもいいと思いますよ」

「どして？」

「だって、ほら。そこに散らばってる紙。よく見てください」

「ん？」

青芝に一番近い紙を手取る。そこには花崎への報復の手順が事細かに記述されていた。

「咄嗟の嘘とは思えません」

「確かに。前半なんて、私らが来たってところ以外は筋書き通りだしね」

「ええ。なので彼女の話は本当だと思います」

「ふーむ。と、なると、私らが懲らしめるべきはこの子じゃなくて、裏にいるコイツだってことか」

「そうですね」

「そっか」

青芝は泣いている女子高生に近づくと、ぽんと頭に手を置く。彼女はびくっと肩を震わせ、手で覆っていた顔を青芝に向けた。その目には怯えが浮かんでいる。

「ごめんなー。もうちょっと話して欲しいことがあるんだけど」

「……なに？」

「あんたがいう、この裏で糸引いてる人物って誰か教えて欲しいんだけど」

「……………わかった。信じてくれるならなんでもする」

そして女子高生は一呼吸おいて、言う。

「その人は——」

白草と青芝は難しい顔をした。



俺の部屋から五人が去った後。

俺は恒例になりつつある『嫌な予感』を感じ、でもそれがなんの予感なのかわからず、首を捻っていた時。

それは訪れた。

——グーグー。グーグー。

俺の携帯がいきなり震えたのだ。

鳴らない（震えない）携帯に寂しさを抱く、そんな純真な心を持つ俺にちょっとした緊張が走る。——え、もしかして友達経由で電話番号を知ったまだ見ぬ女の子からのいきなりの告白電話とか！？…………それはそれでかなり面倒な話ではある。

そんなくだらない妄想、もとい悪夢はさておき、俺は携帯を取り上げ、小さなサブディスプレイに映し出される着信番号を確認する。

『光由（みゆ）』

期待外れにそこには着信者の名前が表示されていた。詰まる所、既に電話帳に登録された人物からの連絡だったということである。しかもこの名前……我が妹のものである。

残念がるのもそこそこに、俺は通話ボタンを押した。

「はいよー、どうした？」

『あ、兄さん？』

涼やかな声が聞こえた。妹の声である。

妹の光由は兄の俺が言うのも変だが、かなり大人びている。もしかして俺が弟ではないかと思うぐらいだ。性格もそうだが、見た目もだ。中学生なのに『高校生です』と言ってもバレない、とこの間本人が話していた。正直な話、大学生、OLと偽っても、状況と服装次第ではごまかせると俺は密かに思っていたりする。言ったら本人は怒るので口には出さないけど。

『お久しぶり』

「おひさー」

『今、大丈夫？』

「おう、ちょうど今暇になったところだ」

『そう、良かった。兄さん、元気でやってる？ご飯とかちゃんと食べてる？』

「お、おお。そりゃまあ人並みの生活はしてるつもりだけど……」

『ほんと？兄さんって結構平気で嘘つくからなあ』

「なんで俺が人並みの生活をしてたら嘘になるんだよ」

『そもそも兄さんの人並みの基準が嘘っぽい』

「それは確かに人それぞれ価値観は違うけども、その言い回しはそこはかたなく馬鹿にされてる気がするぞ？」

『兄さんが嘘っぽい』

「ストレートに存在否定!？」

『お金無さそうだよね』

「ごめんなさいその通りなんですけどそろそろ心が折れそうなので本題に入っただけないでしょうか？」

『あはは、兄さんって苛めやすく楽しいな』

これが我が妹である。

その後、話を聞くと大した用事は無いようで、純粹に俺の安否を確認したかったらしい。普段はそんなことしないのに珍しいこともあったものである。ついさっき出て行った五人といい、今日は雪でも降るんじゃないだろうか。真夏の雪。風流ではないか。

俺は妹と雑談を含めて結構長い間しゃべっていた。だいたい1時間ぐらい経った頃、光由が「そろそろ」と切り出してきた。

『それじゃあ、兄さん。また帰ってきたときにでも』

「おう、それじゃあな」

『部屋の日当りいいんだし、たまには布団もちゃんと干さないと——』

「あーあー、もうわかったから。またな！」

『まったくもう。またね』

ピッ!

そうして俺は妹との会話を終えた。室内に静寂が戻り、いつもの俺の部屋の雰囲気妙に際立った気がした。……近いうちに実家に帰省でもしてみるかな。

それはさておき、俺は調べることができてしまった。面倒ごと——と言えはそうかもしれないが、ちょっと気になったことがあるのだ。自ら首を突っ込むのはどうかと思うが、いずれは直面しそうな気がするので事前調査をしておくのもいいだろう。心構えは重要である。

俺は重い腰を上げ、携帯と財布を適当にポケットにしまい、スペア鍵を手に部屋を出る。

——向かうは俺の住んでいた『前のアパート』である。

……

俺は今年の春に一回引っ越している。かなりばたばたとした引っ越しただけに、春休みは掻き回されてしまった。その経緯は、まあ、語らなくても大丈夫だろう。

そして目の前にそびえる建物がその以前住んでいたアパートだ。鉄筋コンクリートの4階建て。道路に面した壁にずらりと並ぶ玄関ドアが印象的だ。

太陽の陽を背に俺はそのアパートを観察する。雨風で外壁が少し汚れているが、古めかしい印象はない。玄関と真反対にベランダがあり、エアコンのダクトが伸びている。ベランダ側は決して日当たりがいいとは言えず、涼しい影があたりを包んでいた。再び玄関側へと戻り、俺はアパートを見上げた。

「……」

なるほど。これが何を意味するのかわからないが、きっとロクでもないことに違いない。俺はげんなりしつつ、この場から立ち去ることにした。

……

見慣れた木造のアパートに帰ってきた。

部屋には戻らず、駐車場でこのアパートを見上げる。西に傾きつつある太陽が目の隅に入り、やや眩しい。古びた屋根がこの建物の歴史を語っている。

俺は一呼吸おいてから、太陽の位置と建物の関係を調べ始める。

そう重要なのは方角だ。

玄関側がやや東よりの北向き。そしてベランダ側が西よりの南だ。そう、日当たりがものすごく良い。ベランダで布団を干せば、確かによく乾くだろう。

俺が空を眺めつつ、思考を巡らせているとばたばたと走る音が聞こえてきた。

そして、それを認識したと同時に。

「く、倉部くん！」

大声で俺の名前が呼ばれた。

——ぼんやりとしていた嫌な予感が輪郭を現したのは、その数秒後だった。

——『倉部』

五人の女性達が各々の場所で聞いた名はそれだった。

話を聞き終えた彼女達は、一直線に『倉部光司』の元へと急ぐ。『倉部』という名字は珍しい。その上、彼女達が解決に向かわせるよう努力している問題は『倉部光司』を通じて依頼されたものだ。名字だけの情報であるが『倉部光司』を疑わざるをえない。

しかし、何故——。

五人の女性は同じ思いを抱きながら、あの木造アパートを目指すのだった。

.....

最初に合流したのは、花崎と佐倉・藤枝であった。お互いの慌てぶりに嫌な予感を抱きつつ、三人はこれまでの経緯を教え合った。

『倉部』というキーワードに、ますます『倉部光司』が怪しくなる。

「倉部くん.....どうして.....」

「.....まだ倉部がやったと決まった訳じゃない」

「そうです。あれこれ考えるより直接本人に聞いた方が早いですよ」

そうこうしている間に、白草と青芝がやってきた。合流した二人は口早に経緯を説明し、そして『倉部』というキーワードを提示した。しかしながら花崎、佐倉、藤枝の反応の薄く、白草と青芝は怪訝な表情をする。佐倉が代表して、二つの問題にも『倉部』という人物が関わっていることを説明した。

驚く二人と、暗澹とする空気。

『倉部光司』は黒幕なのだろうか？

「.....倉部さん」

「もしあいつだったら、ちょっときつめにお灸を据えないとな」

五人は再び走り出す。

.....

今日訪れるのも二度目となった二階建ての木造アパート。五人は息を切らしながら、その駐車場へと走り込む。二階へと続く階段は、舗装されていないこの駐車場を抜ける必要があるからだ

。しかしながら、彼女達は階段を登ることなく立ち止まる。その駐車場には目当てである人物、倉部光司が立っていたのだ。

彼は五人に背を向けた状態で、何やらぼーっと空を見上げていた。

「く、倉部くん！」

真っ先に声を掛けたのは藤枝だった。

切羽詰まった彼女の声に、倉部はビクッと肩を揺らし振り向く。見知った面々だと判ると、彼は安堵の表情を浮かべる。しかし、それも長くは続かず、五人の様子に彼は訝しげな表情を作る。

「あれ？どうしたんだ？なんだ、その、走ってきたのか？」

倉部の問いに誰も答えない。

しばらく沈黙が続き、倉部が沈黙に堪えかねてそわそわし始めた頃、花崎がぐいっと一歩前に出た。

「倉部さん。聞きたいことがあります。私が今日止めに行った例の『投げ販』の主犯なんですが、どうも『倉部』という名字の人物らしいのです。何かご存知ですか？」

倉部は無表情のまま固まる。

「……あたい達も、止めに行った若い男連中が『倉部』に唆されたと言ってた」

「……倉部くんじゃないよね？」

「倉部、正直に答えてくれ」

倉部は押し黙る。

「私達の止めに行った依頼主、『倉部』に頼まれて花崎に依頼した、とおっしゃってました」

「そいつ、結構ノリノリだったから吐かせるまでに苦労したよ」

「……倉部さん。お答えください」

五人が倉部の名を呼ぶ。

すると倉部はぐっと両手を天に向けて伸ばした。ぐぐーっと背伸びをし、一気に両手を降ろすと、深いため息をする。

「はあああああ～～。……ま、そこまで言われちゃ答えるしかない、かな」

誰かの唾を飲み込む音が聞こえる。

倉部は五人の方に顔を向け、なんの感情も籠っていない表情のまま言い放つ。

「……そうだよ。全部俺が仕組んだことだ」

嘘、と藤枝の口から声が零れる。

佐倉はぎりっと奥歯を噛みしめ、花崎は纏う雰囲気冷たくし、白草は手で口を覆い、青芝は威嚇するように倉部を睨む。

「どうして、そんな。倉部くん！」

藤枝の問いかけに、困ったような表情で倉部は答える。

「どうして、って。……大した理由はないけど。強いて言えば今この状況を作りたかったから？」

「それってどういう——」

「嫌われたかった、てことだよ」

「——」

「はあ……みんなさ、俺のこと評価しすぎ。身に余る過大評価は結構きついのはわかってる？——そんなわけで疲れるから、あんたらの『日常』にちょっと傷をつけたってだけの話」

倉部は淡々と語る。

「あとにご存知の通り。どう？俺のこと、嫌いになった？」

誰も喋らない。誰も語らない。誰も口を開かない。

ふつつつと湧き上がる怒りの感情が五人から立ち昇る。

「ま、俺って強いから。五人がかりでも倒すのは難しいかもねー」

倉部が片手をあげ、ちょいちょいと手招きする。

「ほら、かかってきなよ。みんなまとめて相手を——」

倉部の台詞が終わる前に、事は動き出した。

まず花崎が姿を震ませるほどのスピードで倉部の背後に回る。そして、絶対に躲せないように体当たりをしながら、背中めがけて神経毒の塗られた画鋏を突き刺す。倉部は体当たりされた反動でバランスを崩し、前のめりになった。

そこを狙って、佐倉のコインが弾かれる。狙撃のモーションは判りやすく、倉部は事前に察知していた。しかし、花崎から受けた毒が体の自由を奪い、射線から体を逸らすことが出来なかった。

一発。

空気が爆発するかのような、激烈な一発が倉部の腹部に直撃する。倉部はその衝撃により、空中に浮かぶ。

そこに藤枝が追い討ちをかける。

特技である早撃ち。計四発のコインが倉部を捉え、高く高くその体を持ち上げる。

アパートと同じ高さくらいか。

上昇を続けていた倉部の体は、徐々に重力に負け、自由落下を開始する。

そのタイミングを見計らい、白草と青芝が飛ぶ。

彼女達の手には硬く、堅く、頑丈に作られた棒状の新聞紙が握られていた。

渾身の力を込め、二人同時にそれを倉部に向けて振り降ろす。

倉部は重力と衝撃により加速され、そして地面へと衝突した。

ザザッ！と倉部の体が地面を擦る。

数メートルほど進み、そして程なく倉部の体が止まった。

倉部は土まみれになったまま、動かない。

ざっ、と倉部の回りに十本の足が並ぶ。

「……一応、知り合いだったよしみでこれぐらいしてあげるよ」

青芝が言う。

「これでもう私たちは縁切れです」

白草が言う。

「倉部さん。鍵、返しますね」

花崎が言う。

「倉部。残念だよ」

佐倉が言う。

「さよならだね。倉部くん」

藤枝がそう言うと彼女達は見合わせたように立ち去っていった。

花崎が去り際に放り投げた鍵が、横たわる倉部の目の前に落ち、そして——

——ちゃりん……



ざりっ、と。

俺が手を動かすと砂利を擦る音が聞こえた。

体中が痛い。

「……………いつ」

全く、彼女らは容赦と言うものを知らないのか。……………一応これでも抑えたとは言っていた  
っけ。どう考えても本気だったけどな、あれは。

俺は軋む体を起こし、あぐらをかいて座った。腕や背中、腹についた汚れを手で払う。腹の辺  
りは触れるだけでも痛むので優しく労りながら汚れを落としてあげた。

「……」

ちょっと惨めな気分だ。軽く泣きそうである。

それにしてもあの目、怖かった。トラウマだ。今日の夢に出てきてもおかしくない。

「……さてと」

俺が気分も変えるためにも掛け声をあげ、立ち上がるつもりだった。が、その直前。  
——ざっ、と足音が聞こえた。

「随分、こっぴどくやられたみたいだねえ」

背後から人の気配。

俺は足や尻、服の裾についた土を落としてつつ立ち上がり、振り返った。

ゆっくりと向けた視線の先には一人の人物が立っていた。身長は俺と同じぐらい。服装のセン  
スも似ている。いや、それよりももっと気持ち悪いほどの特徴を持っていた。

『俺と同じ顔』だった。

毎朝、歯を磨く時に否応でも眺めているあの顔である。左右反転していないため他人から見た  
自分はこんな風に写っているのかとなんとなく思ってしまい、なんだか妙な気分だ。

俺と同じ顔をしたそいつは楽しそうに笑みを浮かべている。やめろ、なんか恥ずかしいぞ。

俺がなんの返答もしないことをいいことに、そいつは語り始めた。

「まったく、君って人は何を考えているかわからないよ。もしかして馬鹿なのかい？……ま、それはそれでいいのだけど。実に面白いと思うよ？僕は」

意味があるとは思えない台詞を、大仰な仕草で、しかも俺の顔で、おまけにどや顔で言われた。ええい、鬱陶しい。俺の顔でそんなむず痒くなるようなことするな！

「……どうやら、この顔が気に入らないようだね」

「顔だけじゃない。全部だ」

「君は自分が嫌いなのかい？」

「自分を好きだ、って言いきれない人間の方が少ないと思うぞ」

「肅然としてるね」

「倅然としてるつもりなんだけどな」

くだらない会話だ。本筋が全くない。ふわふわとした言葉のキャッチボール。

……そろそろ頃合いだろう。

「……なあ、もういいだろ？」

「何がだい？」

「そういうのだよ。もうお遊びは止めにしよう、って言ってるんだ。『俺ごっこ』なんかして何が面白いってんだ。何一つ良いことなんて無いぞ？金も名声も特別な力も何もない。普通の男子高校生だ」

「……」

「だからもう『俺の顔』でいるのはお終いにしよう」

——な、我が妹よ。

先に注意を言っておこう。

俺は別に双子じゃない。そして妹とも顔がそっくりな訳でもない。

だが目の前のこいつを妹と認識した、認識できたには理由がある。それは単純明快な理由である。

『倉部光由だから』だ。

「……ははは、君は何を言ってるだい？『僕』が『君の妹』？気持ち悪いこと言わないでくれよ」

「じゃあ聞くが、お前はその『顔』。どういう説明をつけるつもりだ？」

「たまたま君と同じ顔で生まれたってだけだよ。世の中には同じ顔をした人間が三人はいるって言うしね」

「無理矢理だな」

「そうかな？一応筋は通ってると思うけど」

「……『特殊メイクの得意な人物とコネを持つ人間が俺に成り済ましている』って言った方がまだ現実的じゃないか？」

「……」

「いや、そう言えない理由があるんだろうな。例えば——」

俺は奴の目をしっかり見据えつつ、言う。

「——その条件が当てはまってしまふ、とか？」

凶星をついたつもりだが、奴の瞳はまだ余裕があった。

「……それで？そんなの誰だって思いつくことだよな？」

「そうだな。それでお前はこう言うんだ。『仮にそうだと、妹であるとは限らない』」

「……………」

「それがなー、そうでもないんだよ。だって考えてみろよ。そんなコネを持っている妹が居れば、兄なら真っ先に疑いたくなるもんだろ？しかも『兄の顔』だろ？関わってるとしか思えないよな」

「だけど——」

「『妹が協力しただけかもしれない』ってか？」

「……………」

「『第三者が妹に協力を仰いで俺に化けている』のか『第三者と妹が共謀して俺に化けている』のか、『第三者を妹が協力させて俺に化けさせている』のか。その三つの可能性があるが、どうも納得いかないんだよなあ。だって俺の姿でそこら中を行動していたんだろ？俺の予想だが『も

し倉部光由だったらそんな面白そうなことを他人にやらせたくない』はずなんだよね」

すべて根拠のない憶測にすぎない。だが、俺は『倉部光由』の兄だからこそ確信を持てる。  
——こいつは俺の妹だ。

「もう隠す必要はないだろ？——光由」

俺が妹の名を呼ぶ。

すると俺の顔をしたそいつ——光由は、どこぞのSFアクション映画のように、あごの下に手をかけると、ベリベリと俺の顔を剥いでいった。剥がれてしわしわになる自分の顔を眺めるのはなんと胃が気持ち悪くなる状況だ。

そして光由の顔——中学生とは到底思えない大人びたその顔が俺の方を向く。そして光由はその口をゆっくり開いた。

「——いつから気づいてたの？」

俺はその質問に笑うしかなかった。

「いつから、ってお前。わざと気付かせたんだろ？」

不自然な電話、冗長な雑談、そして妙な会話の流れ。それも全部計画のうち、ってか。

「驚いた。兄さん、案外頭回るんだね。てっきり『日当り』の件を暴いて得意げになってるのだとばかり思ってた」

「舐めんな。何年お前の兄貴やってると思ってるんだ」

先刻、俺たちが電話越しに会話を終える直前、光由は俺の部屋の『日当り』について触れた。そこに俺は違和感を感じたのだ。その違和感とは、そもそも日当りの状況を何故光由が知っているのか、という点である。

以前住んでいたアパート、あそこはベランダに影が差し、決して日当りがいいとは言えない。そして現在住んでいるアパートならば確かに日当りは良好だ。そこまでなら、現在住んでるアパートのことを言っているのだと思える。

しかしである。

ここで重要なことを言うと——、

俺は家族に引っ越したことを伝えていない。

ばたばたした引っ越しであったので、『うっかり』伝えて忘れていたのだ。

そうすると先述の話が変わってくる。そう、光由が『日当りのいい部屋』ということを知り得るはずがないのだ。そしてそうでないのだとしたら、俺が関わらないところで何らかの手段により知ったことになる。偶然知り得たのなら連絡の一つぐらいあっていいものだが一切なし。なにがある、と思いつくのはそんなに難しくないだろう。

そう、難しくない。

俺はまんまと光由に仕組まれていたのだ。

俺が仕組まれていることに気付いたのはこれも単純な理由。

——『倉部光由がこんなミスをするだろうか？』

「でも俺がボコボコに殴られる方を選ぶなんて予想できなかつただろ？」

「……そうね。あれはさすがに。兄さんがどMに見えてきたもの」

「どMなんて言葉、どこで覚えてきたんだよ……」

「そんなの小学生でも知ってることよ」

「マジで!？」

末恐ろしい……。

俺は本題へ話を戻す。

「わかんないのが、どうしてお前がそんなことをしたのかってことだ」

「……まあ、兄さんにはわからないよね」

光由は目を伏せ、ため息をつく。

「兄さんって、なんか何かに巻き込まれることって多くない？」

そう言われて、ここ最近を振り返る。……ちょっと目眩が。

「兄さんは自覚してないかもしれないけど、小さい頃からそうだった。私の目の前で兄さんだけが巻き込まれることだってあった。最初のうちは兄さんが漫画の主人公みたいだって本気で思ってたのよ？」

それは初耳である。俺はただ人生は無難に過ごしてきたつもりだったのに。

「でもそのうちになんで私じゃないんだろう、って思うようになった。私だって漫画の主人公のようになりたいのに、巻き込まれるのは兄さんだけ。だから私は自分から巻き込まれにいったの」

そう、この倉部光由という人物は厄介ごとに自ら首を突っ込むことが多かった。俺が厄介ごとを避けるごとに、妹はそれだけ厄介ごとに関わっていた。

特殊メイクというスキルを持つ人物と知り合ったのも、その性格からだ。

「でも、兄さんが一人暮らしするようになってから、私の周りに厄介ごとがやってくるのが少なくなった。そしてこの間、偶然兄さんを見かけたとき、当然のごとく巻き込まれていた。その時、思ったの。やっぱり兄さんなんだな、って」

俺は何も言えない。言えることがない。

「だから私は、兄さんのそんな『日常』を掻き回してみたくなくなったの」

八つ当たり。

実に子供っぽい。……こんな成りでも、やはり中学生なのだ。

「……理由はそんなところ」

光由はふっと息を吐くと、楽しそうに笑った。

「お前は俺に正体明かした後、どうするつもりだったんだ？」

「本当はね、さっきの五人がまだ残ってるはずだから、正体ばれたらみんなで私を叩いてもらうつもりだったのよ」

「お前こそどMじゃないのか？」

「さあて、どうかな？」

光由が艶かしく笑う。

「あーあ、つまんない。黒幕、っていう面白そうな立場になったつもりだったのに、最後の見せ場でうまくいかないなんて。その上、せっかく兄さんの格好したのに全然面白いことが起きないし。兄さんは一体どうやってそんな体質になったの？」

「体質って……」

「さっきだってあの人達に嫌われるようなこと、わざと言って。面白い人達なのになんでそんなことするかな」

光由は不機嫌そうに唇を尖らせる。

「……はあ」

そんな光由の様子に、俺はわざとらしくため息をついた。俺の行動に怪訝な表情を浮かべる光由。

「なにか勘違いしてるようだから言うけど、俺は別にわざと言ったんじゃないぞ？あの五人から解放されるチャンスだったからな。あれは本音だ。さらに言えば、そのチャンスをくれたことに感謝してるぐらいだ」

鍵も返してもらえたしな、と俺は続ける。光由は訳が分からないと言った体で眉をひそめる。

「おかしいよ」

「別におかしくはないだろ。俺は俺の『日常』を守りたいだけだ。俺が嫌われようが関係ない。ただ——」

「何？」

「変わらない『日常』を壊されるかもしれない時の気分ってわかるか？不安や焦り、いい知れない恐怖。無力感を感じる事だってある。最低の気分だと、俺は思う。——それをお前はあいつら五人にしたんだよ」

「……………もしかして怒ってる？」

「なんでそうなる」

「兄さん、あの人達のこと、好きなの？」

「だからなんでそうなる。俺はただ、人様に迷惑をかけないように、と説教してるだけだ」

「ふーん。……………でも私は反省しないよ？だって私は悪いことをしたとは思っていないもの。わかる？なんの変哲もない『日常』が壊れる瞬間の気分。それまでとは違った『非日常』が目の前に広がるの。開放感、爽快感、スリル。たまらない快感だよ。それを味わってもらいたかっただけ。——兄さんにもね」

俺たちは睨み合う。

意見を譲らないのが、わかる。兄妹だからだろうか。

「……こりゃ荒っぽい説教が必要かもな」

「……兄さんこそ」

俺はぼきりと指を鳴らす。

光由はその音に姿勢を低くし、構える。

——カチャリ、と。

どこかで何かの音がした。

「「——！」」

その瞬間。

倉部光司と倉部光由。

俺たちの兄妹喧嘩が始まった。



陽が西に傾き始め、じきに日没となるその時間。

地面を蹴る音、擦る音、抉る音がこの駐車場に響いていた。

俺は息を切らしながら、妹の光由を目で追う。

あれから数分、喧嘩が始まってから俺はまだ一発も光由に食らわせてない。光由はすばしこくひらひらと俺の鉄拳制裁を避ける。その上光由からは手出しをしてこない。茶化されてるようだ。ちくしょう、説教のはずなのに、惨めだ。

「はあ……はあ……」

「兄さん、もう息上がってるの？……運動不足でしょ」

「……ほっとけ」

余裕の発言を聞き流し、俺はこの喧嘩の勝算を探す。

普段から面倒ごとに首を突っ込むせいか、妹の体力は同年代からしたらおかしいほどずば抜けている。それに荒事にも動じない精神力、豊富な経験がちょっとやそっとのことでは動揺を誘えない。ついでに頭の回転も速く、すでに俺にどう勝つかを数通りぐらいは考えていそうだ。

……圧倒的に不利だ。

あれ、なんで俺、こいつに喧嘩吹っかけたんだろう？

あー、面倒だ。

面倒だが——気合いでなんとかするしかない。

「うおりゃ！」

俺の低姿勢からの蹴りが光由の足を払おうとする。が、案の定光由は軽くジャンプしてそれを避ける。

俺は空を切った蹴りの勢いで体を回転させながら、姿勢を戻しつつ右手を突き出す。

回転の力が加わった拳は着地直後の光由めがけて突き進んでいく。

が。

光由は表情も変えず、着地しつつ姿勢を極限まで低くして俺の右手を避ける。

ぐっ、と地面に力がこもる音が聞こえた。

——嫌な予感がする。

ここで突っ込まれたらモロに食らってしまうんじゃないか？

俺は右手の勢いに引っ張られるように左斜め前、ちょうど光由から見た右手側の空間、に向かって飛び込む。地面が目の前に迫るのを頭の隅で感じながら、俺はとっさに前転をしていた。

土と、転がったときに感じた小石の感触が体中を覆う。

転がった後、しゃがんだ状態からすぐに光由のほうへと向き直る。

光由は低い姿勢からすくっと立ち上がる場所だった。

「頑張るね、兄さん」

「そりゃお前。喧嘩で兄が負けるなんてみっともない真似したくないからな」

「ふふ、それって不利な人が言う台詞だよ？」

「うるせえ」

「兄さん、いつからそんなに弱くなったの？昔はもっと強かったよね？」

「……お前が強くなり過ぎなんだよ」

「まあね。これが私の『してきたこと』だから。これが私の主張だから、ね」

「楽しそうでは何よりだ」

「そうでしょ？兄さんも一緒にやろうよ」

「やだね。面倒だ」

「……頑固だね。うんざりするくらい」

「これが俺の主張だから、な」

「……。それじゃ、その主張をちょっと崩してみようかな！」

光由はその場で軽くステップを踏む。

そして数歩進み、跳躍した。

俺が見上げるほどの高さまで跳んだ光由はそのまま右足を振り上げ、俺の頭上めがけてかかとを振り下ろしてくる。

俺は体を横に飛び、それを避ける。大きなモーションだけに避けるのには苦労しなかった。

が、俺のさっきまでいた地面には大きく凹み、クレーターのようになっていた。

……こいつも大概人間離れしてるな。

そんな感想も口にする暇をもなく、光由は追撃をしてくる。

一回の跳躍で間を詰め、回転蹴り。

そして顔ばかり狙うラッシュ、たまに紛れて腹部を狙う攻撃。

なにか恨まれてるんじゃないかと思うぐらいに容赦のない猛攻を、俺は腕で防御しつつ、石につまずき、バランスを崩し、転びながら避けていく。

さすがの光由も攻撃を始めると体力を使うみたいで、頬を伝う汗が見て取れた。

俺はというと、肩を上下させ全力で息を切らしていた。汗だくなのは言うまでもない。

俺が息を整えようと、深呼吸をしようとした瞬間。

それを狙ったかのように光由が突っ込んでくる。

息を吸い込んでいる途中に動き出したので、俺は驚いて咽せてしまう。情けねえ。

息苦しさで、咳き込んだ反動で動けない状態の俺に、光由の拳が迫る。

——殴られる。

そう頭によぎったとき、光由の動きが止まった。

光由はいままで見たことのない表情をした後、口を開いた。

「良かったね、兄さん」

「……？」

「ほら、お友達が助けにきてくれたみたい」

光由は俺の背後を指差した。

まさか、と思いつつ、俺は振り返る。

去ったはずの5人がそこに立っていた――。

## 4-11(END)

---

「倉部くん……」

真っ先に声を出したのは、やはりと言うべきか、藤枝だった。

5人の表情は複雑な感情が入り交じったもので、口を開いた藤枝も言葉が続かないようだった

。

……まったく面倒なことだ。

俺は気まずそうに立っている5人に背を向け、5人ではなく光由に向けて言葉を放つ。

「助け、ね。おい光由。勘違いするなよ。これは『俺たちの喧嘩』だ。助けなんてあっていいはずがないんだよ」

後ろの5人がどんな表情をしているかわからない。

わかるのは光由が口をへの字にして、拗ねたような怒ったようなよくわからない表情をしているということだけだ。

俺は続ける。

「どんな経緯でこの人たちが俺の後ろに立ってるかは知らないが、どんな理由であれ助けてもらうつもりはない。たとえ俺が負けそうでもな」

そう、これは兄妹喧嘩。

他人が口出しできるものでもないし、ださせるつもりもない。

決着は俺と妹でつけるべきなのだ。

「——でもまあ、せっかく来たのだし観戦ぐらいはしてもらうか。いいだろ、光由？」

「……別にかまわないけど」

俺は自分でもわかるぐらい、口の端がつり上げてニヤリとしてしまう。

ほんと、退屈しないな。妹+5人には……！

俺は口元を手で覆いながら、5人の方へと振り返る。

「さて、そういうわけだから、せっかくだし俺たちの喧嘩、見てってくれ」

5人は無言のまま、それぞれ顔を見合わせる。

困惑？落胆？憤怒？失望？

どんな感情が彼女らのうちに秘められているかわからない。  
でも、俺は思いついたのだ。笑いが止まるはずがない。  
この兄妹喧嘩を終わらす方法、妹を倒す方法を——！

満を持して披露しよう！  
これが俺の攻略法だ！

「でもまその前に世間話でもしようか」

俺の言葉に一同が疑問符を頭の上に浮かべた。

「実はこいつ、大人っぽい面して俺の妹なんだ。でさ、こいつ小学校の頃——」  
「ちょ、ちょっと兄さん！？何言い出すの！？」  
「いやなに思い出話さ。でさ、笑えるのがこいつ、『忍者になる』とか抜かして学校の池を足にシャンプーハットつけて歩こうとしてるの！」  
「やめてよ！」  
「一歩めでいきなり沈んで結局俺が助けたんだけどさ。そのあとの台詞が『忍者は向いてないからくのいちにする』だって！」  
「やめてって言うてるでしょ！！」  
「あはは！でももっと笑えるのが——」  
「このっ！」

光由が俺に向かって殴り掛かってきた。

だがその拳は先ほどまでと違い、感情で鈍ったもので、俺でも簡単に避けれてしまう。

「どうした、光由。怒ってるのか？そりゃそうだよなー。お前、弄られるの慣れてなさそうでもないな。俺がお前を弄ることも少ないし、お前中学生になってから急に大人ぶるから周りからもかわれる機会も少ないし。でもなー、俺は知ってるんだぞ？お前の笑える過去。今日は気分が高ぶってるから、どんどん暴露しちゃいそうだ！」

「く……！バカああああ！！」

今度は姿勢を低くして突進してくる。

勢いだけで突っ込んでくる光由に、俺は狙いを定め、思いっきり頭をはたいてやった。

バチンッ！

俺の平手が華麗に決まり、辺りに軽快な音が響く。

叩かれてぼさぼさになった頭を抑え、光由は俺を睨んできた。

「終わりだ、光由。それ以上攻撃してきたら、本当に恥ずかしいの、暴露しちゃうかもよ？」  
「……っ！」

光由はきっと眼光を鋭くしたが、これ以上の抵抗とそれに伴うリスクを天秤にかけたのだろう。へたっとその場に座り込んでしまった。

——俺の勝利だ。

何とも卑怯な勝ち方かもしれないが、これは兄妹喧嘩だ。理不尽なのはよくあることである。

「さて。俺の言い分を聞いてもらおうか。——みんなに謝るんだ」  
「え？」  
「え、じゃないだろ。迷惑かけたんだから、謝るのは当然だろ」  
「……わかった」

もっとごねると思ったが、素直に光由はうなずいた。

そして状況についていけないだろう5人に向かって、光由は深々と頭を下げて言う。

「みなさん、今回の一連の事件。私が黒幕です。本当に色々ご迷惑をおかけしたかと思いますが、このように反省してますのでどうかお許してください」

一呼吸おくと、顔を上げ、まっすぐ前を向きなおり最後に一言。

「本当にごめんなさい」

そういうと光由はもう一度頭を下げた。

.....

日が沈み、辺りが夜の闇に包まれ始めた。

某アパートの一室は明らかに定員オーバーなすし詰め状態となっていた。

あのあと光由と5人が和解をし、めでたしめでたし、となったところで倉部光司はその場に寝転がり、「ちょっとだけ休ませて」と言い残すと寝始めてしまった。彼女らは、少し気まずい雰囲気ぎくしゃくしながらも彼が目覚ますのを待っていた。が、一向に起きる気配もなく、花崎が倉部光司の部屋の鍵を取り出し（「緊急事態だから」と言いながら）倉部を彼の部屋のベッドまで連れて行き、いまの状況に至るのである。

少しの間、ぎくしゃくした雰囲気は続いてしたが、藤枝が話を切り出し、5人が説明を始めた。実は自分たちは最初から話を聞いていたこと、倉部をボコボコにした手前出ていきづらかったこと、倉部がピンチとなって思わずでたがどうして良いかわからないうちに事態が終わったこと。光由はただそれを相づちを打ちながら聞いていた。

一通り説明を終えた藤枝が言う。

「でも倉部くんの私たちにに向けた言葉。本音だったってことは、迷惑してたのかな……？」

「……美樹ちゃん」

ウェスタンハットを脱いだ佐倉が心配そうに藤枝を見る。

そんな二人に青芝がきょとんとした顔で言う。

「そりゃ迷惑してたんだろ」

「ちょっと、青芝さん！」

「あ、ごめん」

白草の声に青芝は口を噤む。

花崎は黙って成り行きを見守っているようだ。

そんなやりとりを聞いていた光由は「あの」と口火を切り話し始めた。

「私、思うのですが、兄は皆さんのことを迷惑だなんて思っていないはずですよ」

「光由ちゃん、優しいんだね……お姉さん泣けちゃう……」

徐々に本調子を取り戻してきたのか、藤枝は光由に向かって何の躊躇もなく抱きつく。そしておいおいと泣き真似まで始めた。

さすがの光由もこれには動揺しながら、言葉を続ける。

「いえ、あの、その、こういうのも変ですけど、兄は自分に降り掛かる面倒ごとに対して一切迷惑とか感じないんです。それが兄の『日常』ですから」

「でも嫌われたって……」

「それは単に面倒なことがこれ以上やってこないように、それから皆さんにも面倒ごとがやってこないようにという配慮だと思います」

「……倉部君。……そんなことまで考えてたの？」

「たぶん無意識だとは思うんですけどね。本人自身は本音で言ってるつもりですよ、きっと」

「でも確証がないじゃない」

花崎が言う。『それが倉部が思ってたことなのか』。

光由は口元に笑みを浮かべながら言う。

「覚えてます？兄が私に言っていたこと。『5人に迷惑かけたことが許せない』って。私は『兄さんの日常を掻き回した』って言っているのに、自分のことは一切含まれてないんです。……兄はそういう人なんですよ」

5人が押し黙り、ベッドで寝息を立ててる倉部の方を向く。  
長い沈黙の末、藤枝が一言放った。

「面白いね、倉部くんって」

一同が頷いた。

.....

俺が目覚めると、なぜか自分のベッドでなぜかもう夜でなぜか妹がテレビを見ていた。  
寝ぼけている頭には処理しきれない状況に、俺は再びベッドに横になり頭に血が回るのを待った。だんだん思考がクリアになるにつれ、体中の痛みを感じ始めた。肝心の状況についてはさっぱりわからなかった。

俺は体を起こし、ベッドの上であぐらをかく。

「起きた？」

もぞもぞという布擦れの音に気付いたのか、テレビから目を離さずに妹が声をかけていた。

「おう」

ぼりぼりと腹をかいて、俺は部屋を見渡す。

「.....。もうちょっと寝る」

ばたりとベッドに倒れて、目を瞑ると睡魔が再び襲ってきた。

「私、今日泊まってくから」

「んー？おー.....、んじゃまたあとでゲームでもするか」

「.....うん」

「とりあえずもうちょっと寝る」



光由にそう告げ、俺は睡魔に身を委ねて眠りにつく。  
意識の消える瞬間、ふと頭によぎったのは。

——いちご大福、食べてないや。

完